

慶應義塾大学看護医療学部

研究年報 2024

Annual Report of Research 2024

Keio University Faculty of Nursing and Medical Care

Keio University



巻頭言.....	1
----------	---

看護医療学部教員の 2024 年度研究活動報告 (所属キャンパス別・五十音順)

湘南藤沢キャンパス (SFC)

秋元 直子	2
石川 志麻	3
加藤 由希子	5
金澤 悠喜	6
小池 智子	7
杉本 なおみ	9
杉山 大典	11
鈴木 美穂	12
田口 敦子	13
辻 恵子	15
永田 智子	16
バティ アーロン	18
平野 優子	19
深堀 浩樹	20
福井 里佳	23
藤井 千枝子	24
藤屋 リカ	25
細坂 泰子	26
真志田 祐理子	27
増田 真也	29
松寄 愛	30
水井 翠	31
宮川 祥子	32
山内 慶太	33
山本 なつ紀	35
若林 那於	36



信濃町キャンパス

新井 康通	37
新幡 智子	38
井上 真帆	39
大坂 和可子	40
大和田 陽子	42
小澤 典子	43
添田 英津子	44
田村 紀子	45
富崎 悦子	46
野末 聖香	47
朴 順禮	48
福田 紀子	49
藤島 麻美	50
堀口 崇	51
村上 好恵	53
矢ヶ崎 香	54



慶應義塾大学看護医療学部 研究年報 2024

公開にあたって

2025 年 10 月

慶應義塾大学 看護医療学部
研究推進委員会 委員長 深堀浩樹

慶應義塾大学看護医療学部 研究推進委員会として、『研究年報 2024』を公開いたします。

本委員会は、2023 年 11 月に従来の「看護ベストプラクティス推進委員会」から名称を改め、新たに活動を開始しました。本委員会の目的は、義塾の伝統である「実学の精神」を重んじつつ、看護医療学部の教員による、様々な垣根を超えた自由な研究活動を推進し、社会と未来に貢献できる研究を発展させることにあります。そのことを通じて、従来から目指していた看護医療におけるベストプラクティスの発展にもつながると期待しています。本委員会では、これらの実現に向け、試行錯誤を重ねながら多様な取り組みを模索しており、研究年報の作成と公開もその活動の 1 つです。

研究年報は、2022 年度版から前身の委員会により作成を開始し、当初は学部内での共有にとどめていましたが、2023 年度版からは学部ウェブサイトを通して広く公表することとしました。今回の 2024 年度版の作成に当たっては、研究年報の意義や活用方法、研究活動の広報のあり方などについて学部教員間で多岐にわたる議論を行いました。その結果、有意義な検討が進んだ一方で、公表が遅れましたことをここにお詫び申し上げます。

本年報を、多くの方々にご覧いただき、看護医療学部の教員による 2024 年度の研究活動の全体像の把握や個々の教員の研究活動の現状の理解にご活用いただけますと幸いです。本年報が、研究推進委員会が目指す、社会と未来に貢献できる垣根を超えた学際的で自由な研究活動の発展や、看護医療におけるベストプラクティスの実現の一助となることを願っております。

氏名： 秋元 直子	職位：助教	分野：
2024 年度の研究活動の概要 I. 日本の看護師の'Care Rationed or Missed'に関する質的研究 'Care Rationed or Missed'に関する文献調査を行い研究テーマ、研究計画の検討を行った。 2025 年度の研究開始に向けて 2025 年度学事振興資金の申請準備を行った。 II. 看護学におけるデータベースの利活用に関する研究 看護学におけるデータベース構築・データベース利活用を促進するための看護系学会を対象とした調査研究にプロジェクトメンバーとして参画し調査票の開発を行った。 プロジェクトは調査が完了し論文作成を行っている。		
キーワード 看護倫理学、看護教育、missed nursing care 、 quality of health care、 EBP		
研究業績・活動 なし		

氏名：石川 志麻	職位：専任講師	分野：地域看護学
2024 年度の研究活動の概要 1. 医療的ケア児と家族を支える効果的な多職種連携の在り方検討： 自身の先行研究結果（支援者 16 人（医師、行政保健師、看護師（専門看護師・訪問看護師）、医療的ケア児等コーディネーター、養護教諭等）・当事者へのインタビュー調査にて、医療的ケア児と家族の生活の拡大につながった多職種に関する語りのデータと、文献検討から指標案を作成した）から指標案を作成・修正した。作成した指標案が当事者の生活を広げる多職種支援を推進するものであるか検証のため、当事者－支援者をペアリングして調査を行った。調査開始時点と、指標案を支援者に使用してもらってから約 3 か月後の 2 時点で、当事者には健康関連 QOL 測定尺度 SF-8、支援者には連携意識評価尺度 TCI-14 に回答してもらう他、「指標案使用にて多職種連携で変化したことはあるか」等についてヒアリングを実施した。 2. 社会的孤立予防に資する CBPR： 2023 年 8 月より 2 団地をフィールドに CBPR を実施している。フィールドは共に高齢化率が約 50%、自治会加入率も 50%弱、建設後約 60 年経過と類似している。選定にあたり、行政職員や団地運営会社などステークホルダーと丁寧に協議するプロセスを重視した。研究 2 年目の 2024 年度は前年度の研究成果をもとに、各団地の地域性に合せた社会的孤立・孤独予防に資する介入活動を各 3 回実施した。介入活動のプロセスで PDCA サイクルを意図的に回し、各回の評価となる振り返りを住民やステークホルダーと共に行い、次回活動に反映した。1 団地での介入活動では 1・2 回目の介入活動時にターゲット層（ケアラーや独居高齢男性など社会的孤立・孤独のハイリスク層）の参加が得られず、午前開催という時間帯に課題があるのではないかと評価し、3 回目は午後開催に見直したところ、子どもから高齢者まで多様な年代の住民が約 300 人集まった。活動目的である「時間と場を共にでき、その場に居て良い感覚を持てる」場を作ることができた。単発の介入活動であり、継続性がないことへの懸念があったが、相談支援に携わっている専門職者から「単発だからこそ出かけやすいという人もいる。地域の居場所となる活動に参加を呼び掛けても外出につながらなかった人の姿が今回のイベントでは確認できた」との評価を得た。2025 年度は各団地で 2024 年度に実施した介入活動のうち、社会的孤立・孤独予防に効果を見込める要素を住民やステークホルダーと共有し、その要素を各団地で継続的に実施していくために必要なことを明らかにする。		
キーワード 社会的孤立・孤独予防、CBPR、地域包括ケアシステム、医療的ケア児、多職種連携		
研究業績・活動 【学会発表】 ・石川志麻. 地域の既存コミュニティへの参加につながらない住民の特徴. 第 29 回日本在宅ケア学会学術集会; 2024 Aug24-25; 神奈川. ・石川志麻, 小原安須実. 茅ヶ崎市公立図書館が地域の社会的孤立・孤独予防に果たし得るサードプレイスとしての役割. ヘルスコミュニケーションウィーク 2024; 2024 Sep 28-29; 神奈川.		

- ・石川志麻，加藤文俊，平野優子，加藤由希子，田口敦子，赤塚永貴．大規模団地住民が社会的孤立・孤独に係る健康課題を明確化する過程への研究者の関わり．第 83 回日本公衆衛生学会総会；2024 Oct 29-31；北海道．
- ・加藤文俊，石川志麻，平野優子，加藤由希子，田口敦子，赤塚永貴．「共食」イベントによる大規模団地住民のコミュニケーション機会の醸成．第 83 回日本公衆衛生学会総会；2024 Oct 29-31；北海道．

【学術集会・ワークショップ】

- ・田口敦子，秋山正子，浦山美輪，尾形由起子，曾我智子，中村順子，三輪恭子，石川志麻．当事者×実践者×研究者＝みんなでつくる質の高い実践！．第 27 回日本地域看護学会学術集会実践促進委員会ワークショップ；2024 Jun 29-30；宮城．

【学会における活動】

- ・日本地域看護学会実践促進委員会委員
- ・第 29 回日本在宅ケア学会学術集会 企画委員
- ・ヘルスコミュニケーションウィーク 2024 実行委員

【社会活動】

- ・茅ヶ崎市難病対策地域協議会委員
- ・藤沢市障がい者介護給付費等支給審査会委員
- ・未来先導基金 2024 年度 サステイナブルキャンパスプログラム（2025 年度継続）
健康と地域プロジェクトの一環として、エコキャップ運動・キャップがつなげる D&I 活動を主催している。SFC キャンパス近隣の福祉施設のうち、ペットボトルキャップのリサイクル前分別処理を行っている 2 施設の利用者・職員、SFC3 学部の学生と共にキャンパス内のペットボトルキャップ回収を行っている。共にキャップ回収を行うことで、障がいのある方と学生・教職員の相互理解を促進し、回収作業を通じてキャンパス内のごみ分別への動機づけを高めることを目的としている。

氏名： 加藤 由希子	職位：助教	分野： 地域看護学
2024 年度の研究活動の概要 ・ 個人研究として保護者の子への新型コロナワクチン接種意図に関する調査のデータ分析を行い、結果に関して学会発表を行った。 ・ 田口敦子教授が代表の「ICT 活用による保健師活動評価手法の開発及び PDCA サイクル推進に資する研究」に参画し、母子保健分野の用語の標準化や保健師活動マネジメントツールの開発に携わった。		
キーワード 保護者の子に対するワクチン躊躇、母子保健、用語の標準化		
研究業績・活動 学会発表 ・ <u>加藤由希子</u>，杉山大典，<u>田口敦子</u>，永田智子．生後 6 か月以上 5 歳未満の子を持つ保護者の子への新型コロナワクチン躊躇と関連要因．第 83 回日本公衆衛生学会総会；2024 Oct 29-31；札幌． ・ <u>加藤由希子</u>，篠崎智大，杉山大典，<u>田口敦子</u>，永田智子．生後 6 か月以上 5 歳未満の子を育てる保護者の子に対する新型コロナワクチン接種受容と信頼できる情報源およびヘルスリテラシーとの関連．ヘルスコミュニケーションウィーク 2024 in Yokohama；2024 Sep28-29；神奈川． 短報 ・ 赤塚永貴，田口敦子，石川志麻，平野優子，<u>加藤由希子</u>，福田優衣，吉田裕美，阿蘇瑞季、水流聡子：行政保健師による母子保健活動における顧客体験の可視化に基づく「母子保健版臨床プロセスチャート（暫定版）」の設計．日本臨床知識学会誌．5，43-45，2024．		

氏名：金澤 悠喜	職位：専任講師	分野：母性看護学／助産学
2024 年度の研究活動の概要 妊娠・出産・育児における家族の心理的变化を明らかにし、支援方法を開発することで家族全体の福祉向上を目指した。夫婦の公正感に関する日本版尺度を作成し、育児期の夫婦関係の理解に貢献した。また、母乳不足感をもつ母親に対する IBCLC による感情的支援の実態を調査した。さらに、看護職の業務支援とケアの効率化を目的に、看護理工学的手法による支援ツールの開発にも取り組んだ。		
キーワード 助産学，家族支援，看護理工学		
研究業績・活動 ■妊娠・出産・育児における家族支援と心理的ケアの向上 ・研究目的：家族の心理的变化の理解と支援方法の開発を通じた妊娠・出産・育児における家族全体の福祉向上 - Y. Kanazawa, T. Shibayama: Japanese version of the Equity Sensitivity Inventory Adapted for Married Couples. Family Relations, 73(5), 3232-3249, 2024. DOI: https://doi.org/10.1111/fare.13082 - 薬師寺日菜，川野亜津子，金澤悠喜：母乳不足感をもつ母親に対する国際認定ラクターション・コンサルタントによるエモーションナルサポートの実態。母性衛生，第 65 巻，1 号，129-136，2024。 ■看護職業業務支援とケア向上のための技術開発 ・研究目的：看護職の業務支援やケアの効率化を目指し、看護理工学的アプローチを活用した支援機器やツールの開発 - 塩見咲良，寺澤瑛莉子，鳥居万椰，村上貴人，落合陽一， <u>金澤悠喜</u> ，岡山 久代：妊婦体験ジャケット着用時の姿勢・歩容・腰部負担感の分析－ヒール高による比較－。看護理工学会誌，第 11 巻，168-179 頁，2024. DOI: https://doi.org/10.24462/jnse.11.0_168 ■KGRI（グローバルリサーチインスティテュート）Hidden Jewels - Research Showcase：Vol.13: 自然なお産しか取り扱わない助産師が，なぜ助産学に工学的視点を取り入れるのか？～周産期医療分野における現状と課題～ https://showcase.kgri.keio.ac.jp/researcher/?researcher_id=4db52fee18bd4b208a6e3b8543b7c903 ※掲載論文は、2024 年度のみになります。他の年度の掲載論文や学会発表などに関しては、慶應義塾研究者情報データベースなどをご覧ください。 https://k-ris.keio.ac.jp/html/100016595_ja.html		

氏名： 小池 智子	職位：准教授	分野： 統合（看護管理・政策）
2024 年度の研究活動の概要 1. ケース・メソッドを用いた医療・介護マネジメント教育 1) 医療現場における管理者のマネジメント能力育成プログラム開発 慶應義塾大学病院看護部と共同し、管理実践を行う能力強化を目的に、ケースメソッド研修を実施してきたが、2024 年度は対象を他の部門の管理者に広げ、組織横断的な管理課題を取材して 4 つのケースを作成しにケースメソッド研修（年 6 回）を開催した。参加者は病院部門管理者 16 名（看護部、放射線技術室、臨床検査技術室、食養管理室、事務・管財課）で客観評価、主観評価（管理能力に関する web 調査）により、多様な部門の管理者が合同で研修を行うことの意義・効果をした。 2) 医療・介護現場におけるケースメソッド教育の実践・普及 本プログラムで作成したケース等を使用し、看護系大学院の授業（2 科目）や全国の認定看護管理者教育課程（サードレベル 6 課程、セカンドレベル 2 課程、ファーストレベル 1 課程）等においてケースメソッド教育を実施した。また、これらの教育実践評価の結果等を新たな認定看護管理者教育プログラム検討資料として提出し、ケースメソッドを活用した教育プログラムについて提言をした。 2. 医療勤務環境改善に資する Nudge 開発・普及に関する研究 行動経済学・行動科学等の行動インサイトの知見およびアフォーダンス理論を活用し、多様な職種を対象とした、医療機関・介護施設の職場改善に資するナッジ設計ワークショップを全国 9 箇所開催し、職場のナッジ実践の支援および評価を行った。さらに、ナッジ実践活動事例の収集・分類と効果メカニズムの分析を行った。		
キーワード ケース・メソッド教育、ナッジ、医療安全、感染予防行動		
研究業績・活動 【論文等】 1. 小池智子（2024）：看護業務効率化がもたらす看護サービスの経済効果について考える（解説）、Nursing BUDSINESS (1881-5766) 春季増刊:28-36. 2. 熊谷雅美, 小池智子（2024）：「KKD」から「EBM」への変化のとき～看護師の労働生産性の向上を目指すために～, Nursing BUDSINESS(1881-5766) 春季増刊：38-49. 【学会発表】 1. 小池智子, 加藤恵里子, 内田智栄 他：看護管理能力を開発するケースメソッド教育プログラムの実施と評価, 第 28 回日本看護管理学会学術集会（2024 年 8 月 名古屋） 2. 鄭佳紅, 小池智子, 藤野泰平, 井高貴之 他：看護の適正評価を考えるーポスト 2025 に向けて医療 DX 推進で看護の質を上げる, 第 28 回日本看護管理学会学術集会（2024 年 8 月 名古屋）		

3. 小池智子, 加藤恵里子, 内田智栄 他: ナッジで業務改善: 職場のナッジを設計しよう! 第 28 回日本看護管理学会学術集会 (2024 年 8 月 名古屋)
4. 小池智子, 葛城建史他: VALUE プロジェクト-感染症に強いまちづくり, SFC Open Research Forum 2024 (2024 年 11 月 神奈川)

【講演等】 (研究より得られた知見等の普及活動を中心に記載)

1. 「ナッジで変える・変わる現場のマネジメント」日本看護管理学会学・2024 年トワイライトセミナー (2024.8.22, 名古屋)
2. 「ナッジで変える・変わる現場のマネジメント~思わず行動したくなる仕組みづくり~」セコム医療システム株式会社主催『医療安全管理者養成講座フォーアアップ研修』 (2024.10.6, 東京)
3. 「ナッジを活用した感染管理~思わず行動したくなる仕組みづくり~」国家公務員共済組合連合会感染管理実務者研修会 (2024.10.11, 東京)
4. 「ナッジを活用した看護現場をよくする仕掛け~思わず行動したくなる仕組みづくり~」神奈川県看護協会看護師職能 I 研修会 (202.10.17, 東京)
5. 「ナッジを活用した働きやすい職場づくり~思わず行動したくなる仕組みづくり~」和歌山県看護協会 (2024.10.26, 和歌山)
6. 「医療介護安全とナッジ活用~思わず行動したくなる仕組みづくり~」全日本民医連医療介護安全オンラインセミナー (2024.11.17, online)
7. 「職場の感染管理活動へのナッジ活用~思わず行動したくなる仕組みづくり~」ICN のためのスキルアップ研修 (2025.1.11, online)
8. 「保健活動への行動変容理論の活用~すぐできるナッジ理論の実践~」令和 6 年度特別区保健師会西部ブロック研究会 (2025.1.24, 東京)
9. 「看護管理活動へのナッジ活用~思わず行動したくなる仕組みづくり~」東海大学病院看護管理者研修 (2025.2.6, online)
10. 「健康でいきいき地域活動のススメ」神奈川県横浜市瀬谷区阿久和南部地区講演会 (2025.2.10, 神奈川)

氏名： 杉本 なおみ	職位：教授	分野： 自然言語
2024 年度の研究活動の概要 1. 「在宅移行期にある多疾患併存状態の高齢者に関し在宅医療機関宛診療情報提供書（以下「診情書」）を作成する病院医が在宅医に提供すべき情報」の同定を目的とする一連の研究の最終年度を迎え「在宅移行期多疾患併存状態高齢患者の診療情報提供に関する病院医・在宅医調査（本調査）」を実施した。病院医 264 名・在宅医 263 名に対し、既存研究にて在宅医が「診情書に記載すべき」とした全項目を提示し、各項目の必要度と望ましい提供者（例：病院医、他職種）につき評価を求めた。その結果、病識、治療協力度、福祉・介護利用状況、ACP/DNAR、家族背景、困難場面で頑張る力、頑張る力に影響を与える要因（例：宗教的背景）の 7 項目において二群間に有意差が見られた。全て在宅医より病院医の方がより「病院医による提供が可能・必要」と評価した。上記以外に在宅医・病院医間の違いは見られず、一連の研究により得た知見は両者共に合意可能な内容との結論を得た。 2. 社会的孤立・孤独の予防と多様な社会的ネットワークの構築に関する研究（SDGs の達成に向けた共創的研究開発プログラム～社会的孤立・孤独の予防と多様な社会的ネットワークの構築「サービス・モビリティと多形態コミュニティの繋がりによる孤立・孤独予防モデル構築プロジェクト(AmPlatea)」）の一環として、研究対象地域である神奈川県中郡大磯町での全戸一斉アンケート調査の設計・準備や、体組成計データから地域活動団体を推薦する仕組みである「コミュニティ・コンパス」の実証実験等を行った。また当該研究プロジェクトで実装予定の移動検診車の利用を促す仕掛けに関する基礎研究を看護医療学部 1 年生と行い、Open Research Forum 第 24 回学術交流大会にて「地域で移動検診車の利用を促すポスター作り」および「若年女性の検診受診を促進する広報動画」（奨励賞受賞）として発表した。 3. 医療者が職務上で体験するさまざまな課題を乗り越える力に影響を与える要因に関する 2 種類の研究に着手した。まず看護職が臨床場面で直面する「不確かさに堪える力」としての「ネガティブ・ケイパビリティ」という概念の日英比較を行った。また社会的孤立・孤独状態にある人々を支える立場にある地域専門職（医療職・福祉職）が体験する「道徳的苦悩」およびこれを軽減することを目的とする卒後教育プログラムに関する文献検討と、その結果を踏まえた探索的実証研究の準備を行った。		
キーワード 医療コミュニケーション学、コミュニケーション教育、社会的孤立・孤独、ネガティブ・ケイパビリティ、道徳的苦悩		

研究業績・活動

【学会発表】

・高橋愛海，杉本なおみ（2025）社会的孤立・孤独状態を支援する地域医療職向け卒後教育：道徳的苦悩に関する文献検討を踏まえた提案 第35回日本医学看護学教育学会学術大会．岡山国際交流センター：岡山県岡山市 2025年3月8日．

・寺島青，高橋愛海，河口信夫，庄司和之，杉本なおみ，米澤拓郎（2024）社会的孤立・孤独の予防・低減を目的とする時空間移動情報活用型保健医療福祉連携基盤技術の開発 日本保健医療福祉連携教育学会第17回学術集会 埼玉県立大学：埼玉県越谷市 2024年11月10日．

・杉本なおみ（2024）看護学教育モデル・コア・カリキュラムにおける「コミュニケーション」の捉え方 ～医学・歯学・薬学との比較～ 第1回日本看護コミュニケーション学会学術集会 慶應義塾大学：神奈川県横浜市 2024年9月29日．

・市川直人，片山晋，河口信夫，高橋愛海，杉本なおみ，中澤仁，米澤拓郎（2024）社会的孤立・孤独の解消・予防を目的とするヘルスマーケティング手法の開発：生成AIを用いた体組成データに基づく地域活動マッチングシステム ヘルスコミュニケーションウィーク 2024 慶應義塾大学：神奈川県横浜市 2024年9月29日．

・中川真知子，高橋愛海，杉本なおみ（2024）看護コミュニケーション能力の一要素としての「ネガティブ・ケイパビリティ（不確かさに堪える力）」：日英看護師の語りから読み解く共通点と相違点．ヘルスコミュニケーションウィーク 2024 慶應義塾大学：神奈川県横浜市 2024年9月28日．

【講演】

・杉本なおみ．「クレームの対応を学ぶ」公益社団法人神奈川県看護協会主催令和6（2024）年度訪問看護ステーション教育支援事業．藤沢商工会議所ミナパーク：神奈川県藤沢市．2025年1月17日．

・杉本なおみ．「医療面接における研修医指導」特定非営利活動法人VHJ機構第26回臨床研修指導医養成講座．一宮西病院：愛知県一宮市．2024年11月9日．

・杉本なおみ．「コミュニケーションと医療安全」千葉県松戸市立総合医療センター医療安全研修会．松戸市立総合医療センター：千葉県松戸市．2024年10月21日．

・杉本なおみ．「看護管理（訪問看護におけるコミュニケーション）」一般社団法人神奈川県訪問看護ステーション協議会研修委員会主催2024年度第2回初任管理者研修．ビジョンセンターみなとみらい：神奈川県横浜市．2024年10月12日．

・杉本なおみ．「薬剤師のためのコミュニケーション学入門：現場で使える知識とスキル」第57回日本薬剤師会学術大会ランチョンセミナー5．大宮ソニックシティ：埼玉県さいたま市．2024年9月22日．

・杉本なおみ．「医療のためのコミュニケーション」全国労災病院臨床研修指導医講習会．独立行政法人労働者健康福祉機構総合研修センター：神奈川県川崎市（第32回 2024年6月28日；第31回 2025年1月24日）．

氏名： 杉山 大典	職位：教授	分野：健康科学・病態学
2024 年度の研究活動の概要 2024 年度は以下のテーマの研究テーマに取り組んだ。 1) 生活習慣病対策のための住環境整備に関する研究 2) 関節リウマチ治療薬の適正使用に関する薬剤疫学的研究 3) 健康保険組合員を対象とした禁煙キャンペーン事業の長期効果に関する研究 上記に加え、直接関与しているコホート研究（神戸研究、鶴岡研究）や保護観察中の薬物犯罪者を対象にしたコホート研究など「予防」に関連する研究を行っている。		
キーワード： 予防医学、疫学、公衆衛生学、生活習慣病、健診・検診		
研究業績・活動 堤 史織, 宇佐美 貴士, 高野 歩, 熊倉 陽介, 金澤 由佳, 武林 亨, 杉山 大典, 松本 俊彦. 薬物犯罪の更生保護施設利用者における健康格差. 日本アルコール・薬物医学会雑誌(1341-8963)59 巻 3 号 Page53-66(2024.) Sato Y, Nozue K, Sugiyama D. Posttraumatic negative cognitions in nurses affected by the Great East Japan Earthquake: A longitudinal study two years after the nuclear power plant accident. Arch Psychiatr Nurs. 2024 Dec;53:51-61. doi: 10.1016/j.apnu.2024.09.005. Nishikawa T, Miyamatsu N, Higashiyama A, Kubota Y, Nishida Y, Hirata T, Hirata A, Miyazaki J, Sugiyama D, Kuwabara K, Kubo S, Miyamoto Y, Okamura T. Seasonal variation in vascular dehydration risk: insights from the Kobe Orthopedic and Biomedical Epidemiologic (KOBÉ) study. Environ Health Prev Med. 2024;29:62. doi: 10.1265/ehpm.24-00132. Matsumoto M, Harada S, Ikuta H, Iida M, Kato S, Sata M, Shibuki T, Ishibashi Y, Miyagawa N, Hisamatsu M, Hirata A, Kuwabara K, Takeuchi A, Sugiyama D, Suzuki S, Nakamura T, Okamura T, Takebayashi T. Evaluation of Medication Adherence Among Prevalent Users in Hypertension, Dyslipidemia, and Diabetes Using Health Insurance Claims: A Population-Based Cohort Study in Japan. Pharmacoepidemiol Drug Saf. 2024 Aug;33(8):e5855. doi: 10.1002/pds.5855. Ishibashi Y, Harada S, Eitaki Y, Kurihara A, Kato S, Kuwabara K, Iida M, Hirata A, Sata M, Matsumoto M, Shibuki T, Okamura T, Sugiyama D, Sato A, Amano K, Hirayama A, Sugimoto M, Soga T, Tomita M, Takebayashi T. A population-based urinary and plasma metabolomics study of environmental exposure to cadmium. Environ Health Prev Med. 2024;29:22. doi: 10.1265/ehpm.23-00218.		

氏名：鈴木 美穂	職位：教授	分野：基礎看護学
2024 年度の研究活動の概要 ・医療者のコンピテンシーを行動から定義することを目指した画像解析のための基礎研究として、集中治療室における術後患者にかかわる医療者の言動に関する動画の質的分析を開始した。 ・慶應義塾大学病院看護師とともに、造血幹細胞移植を受ける患者における口腔粘膜炎に対する口腔ケアやその他の要因との関連を電子カルテデータを用いて後ろ向きに探索した。		
キーワード ナースプラクティショナー、画像解析、造血幹細胞移植		
研究業績・活動 【論文】 ・ Suzuki M, Sekiguchi N, Saitoh M, et al. Comparing health care outcomes before and after employing nurse practitioners in cardiovascular hospitals in Japan: A retrospective chart review. J Am Assoc Nurse Pract. 2024; 36(11):629-636. ・ Shozuhara T, Suzuki M. Comparison of nurse practitioner and physician management of diabetes in Japan. J Nurse Practitioners. 2024; 20(8):105130. ・ Yamamoto K, Suzuki M. Advance care planning of patients undergoing high-risk surgery: A concept analysis. Sage Open. 2024. doi.org/10.1177/21582440241284445 ・ 望月麻紀、鈴木美穂. 看護学生のエコー使用が解剖生理学の学習意欲に与える効果：パイロット試験. 看護理工学会誌. 2024; 12:22-26. 【学会発表】 ・ 鈴木美穂、田上恵太、及川裕香、香田将英、原田奈穂子. 訪問看護ステーションにおける診療看護師(NP)採用前後の終末期ケアに関する後方視的研究. 第10回 NP 学会学術集会. 2024. 赤坂 ・ 清水陽一、鈴木美穂、新野真理子、堀芽久美、島津太一. がん薬物療法中の皮膚障害、末梢神経障害、倦怠感に対する推奨ケアの実践状況および関連因子の探索. 第39回日本がん看護学会学術集会. 2025. 札幌 ・ 小澤美悠、藤田志保、中里雅子、星瑠衣華、金高万莉、鈴木美穂. 同種造血幹細胞移植における口腔ケアと口腔粘膜炎に関連する要因の探索：後ろ向きカルテ調査. 第47回日本造血・免疫細胞療法学会総会. 2025. 大阪 【社会貢献活動】 ・ Asian Oncology Nursing Society, Vice-president ・ Asia-Pacific Blood and Marrow Transplantation Group, Vice-chair of Nursing Committee ・ 日本がんサポーターズケア学会、国際委員会副委員長		

氏名：田口 敦子	職位：教授	分野：地域看護学
2024 年度の研究活動の概要 1. PHR (Personal Health Record) 活用による自治体保健師マネジメントツールの開発 2. ライフヒストリー法による援助要請しない地域在住高齢者への社会的孤立予防策の探求 3. A 市 B 区との事業者・地域・大学等と連携した食環境づくり		
キーワード 1. PHR (Personal Health Record)、自治体保健師 2. 援助要請、ライフヒストリー 3. 食環境づくり、食品摂取多様性		
研究業績・活動 1. 住民の健診データや保健師活動記録を蓄積・活用することで、保健師活動の質を評価し、蓄積したデータを利活用することで、保健師活動の改善を図ることを目的とした保健師活動マネジメントツールの開発を行っている。保健師活動マネジメントツールを全国の自治体に普及することで、サービスの質の標準化や自治体間の連携促進に寄与することが期待できる。アルファ版を基に、2024 年度はベータ版の作成に向けて検証を行った。今後はベータ版の実装に向けて検討し、協力自治体と具体的な協議を進める。 2. 援助要請しない高齢者の人生において援助要請しない状況に至った心理的要因、および身体的・精神的問題が生じた際にその高齢者が発する微妙な援助要請兆候を明らかにすることを目的とした研究である。援助要請しない高齢者の定義は、「高齢者の身体的・心理的問題に対してサービス利用が必要と専門職は判断したが、受け入れて貰えなかった者」とした。2024 年度は、2023 年度に引き続き、地域包括支援センター等の専門職から紹介を受け、インタビュー調査を 4 名に行うことができた。現在、分析中である。 3. A 市 B 区の意識調査等から食事のバランスや野菜不足など区民の食生活に悪化傾向が見られている。A 市健康づくり計画に基づき「健康寿命の延伸」のため誰もが自然にバランスの良い食事が摂れて健康になれる持続可能な食環境づくりを推進することを目的に、事業者・地域・大学等と連携した食環境づくりに取り組んだ。A 市 B 区では、食環境の一つである区内 20 か所で展開されている移動販売に着目し、2023 年にモデル地区 2 か所に対して食生活と健康に関する実態調査とバランスのよい食習慣の啓発を行った。2024 年度はさらに対象の 3 か所の移動販売を増やし、10 食品群「さあにぎやかにいただく」のポスター掲示と商品コンテナにポップを掲示したり、移動販売事業者と推定野菜摂取量測定（ベジチェック®）等の健康測定会を開催した。		
原著論文・短報 Uezato A, Sakamoto K, Miura M, Nakajima T, Quý P, Jeong S, Tomita S, Saito Y, Fukuda Y, Yoshizawa N, Taguchi A. Mental health and current issues of migrant		

workers in Japan: a cross-sectional study of Vietnamese workers. *Journal of Social Psychiatry*, 70(1)132-143, 2024. doi: 10.1177/00207640231196742.

齋藤尚子，高瀬麻以，田口敦子，村山洋史．高齢者が感じる生活支援の必要性和住民との関係性：農村部における生活支援未利用者への横断調査．*日本公衆衛生学会誌*. 71(6) 297-306, 2024.

土谷瑠夏，田口敦子，大森純子，村山洋史．地域在住高齢者の生活支援の担い手となる意向および実施と主観的認知機能低下の関連．*日本地域看護学会誌*. 27(2):24-22, 2024.

赤塚永貴，佐野葵，和田涼花，宮川祥子，杉山大典，田口敦子：保健師活動におけるICT活用の促進要因・阻害要因：文献レビュー．*日本臨床知識学会誌*. 5, 66-68, 2024

赤塚永貴，田口敦子，石川志麻，平野優子，加藤由希子，福田優衣，吉田裕美，阿蘇瑞季，水流聡子：行政保健師による母子保健活動における顧客体験の可視化に基づく「母子保健版臨床プロセスチャート（暫定版）」の設計．*日本臨床知識学会誌*. 5, 43-45, 2024.

和田涼花，大澤まどか，赤塚永貴，石川志麻，平野優子，村嶋幸代，田口敦子：母子保健記録における電子システム活用の効果と課題：行政保健師に対するインタビュー調査．*日本臨床知識学会誌*. 5, 63-65, 2024.

氏名：辻 恵子	職位：准教授	分野：母性看護学／助産学
2024 年度の研究活動の概要 1. 不確実性や倫理的ジレンマを孕む課題に取り組む助産師のネガティブ・ケイパビリティの解明に関する方法論の検討。 2. チームの納得を促進するための看護師のコーディネート力向上プログラム開発と評価（プログラムの実施・評価）および、ゲーミフィケーション等による能力開発に関する検討。		
キーワード 周産期遺伝看護、Shared Decision Making、調整力、Negative Capability		
研究業績・活動 （著書・論文・学会発表） 辻恵子：第5章1節 リプロダクティブ・ヘルスにおける倫理，2節 女性の選択と意思決定プロセスにおける支援，第6章2節 先天異常をもつ子どもを出産した女性と家族への看護．In 有森直子編：母性看護学Ⅰ概論－女性・家族に寄り添い健康を支えるウィメンズヘルスケアの追求．第3版．医歯薬出版．2025．pp.101-129, pp.146-157. 辻恵子：第Ⅱ部ウェルネスで考える周産期の看護ケア関連図 1. 妊娠期．In 細坂泰子編：エビデンスに基づく周産期・母性看護ケア関連図．中央法規出版．2024．pp.32-45. 辻恵子，荒木奈緒，他：学会誌の発展に向けた協働：投稿者・査読者・編集委員会の連携による今後の展望．日本遺伝看護学会誌．2025．23, 7-12. 飯岡由紀子，杉本知子，辻恵子，大場良子他（2024）看護職の調整力向上プログラムの実行可能性と効果の検討：パイロットスタディ．第44回日本看護科学学会学術集会講演集（44rd-suppl） （その他） ・辻恵子（2025）．時の話題 日本の出産を考える セクシュアル・リプロダクティブヘルス・ライツ－その人らしい選択を支える．三田評論．2025.3月号, pp42-43. （社会活動など） ・日本助産学会：査読委員 第38回学術集会査読委員 ・聖路加看護学会：査読委員 ・日本遺伝看護学会：学会誌編集委員会委員長，査読委員，第23回日本遺伝看護学会学術大会企画委員		

氏名：永田 智子	職位：教授	分野：在宅看護学
2024 年度の研究活動の概要 2024 年 8 月に日本在宅ケア学会学術集会を学術集会長として開催することに注力したため、自らの研究活動を主体的に行うことができなかったが、COI-NEXTへの採択、科研費の継続など、当事者主体の「在宅療養支援・療養場所の移行期支援」に関する研究プロジェクトは継続的に行っている。		
キーワード 退院支援、移行期支援、在宅看護、訪問看護		
研究業績・活動 論文 Natsuki Yamamoto-Takiguchi, Satoko Nagata. Factors Influencing Psychological Safety Among Japanese Home Care Nurses. Home Health Care Management & Practice, 2025 (査読あり) 小沢 浩美, 永田 智子. 医療的ケア児の育ちを支える：保育所における医療的ケア児への看護師による支援. 日本看護科学会誌, 44, 1159-1169, 2024 (査読あり) 山本なつ紀, 内山映子, 永田智子. COVID-19 感染拡大が地域住民や地域活動に及ぼす影響とポストコロナ社会での住民主体型地域活動再興に向けた課題の検討. 医療の広場 64(5) Page17-20, 2024 (査読あり) 永田智子. 「望む場所で暮らす」を叶えるために. 日本在宅ケア学会誌, 28(2), 4-9, 2025 (査読なし) 永田智子. 【リハビリテーション医療と入退院支援】入退院支援の重要性. Journal of Clinical Rehabilitation, 34(1), 12-16, 2025 (査読なし)		
学会発表 永田智子. 「望む場所で暮らす」を叶えるために（会長講演）. 日本在宅ケア学会学術集会, 2024 年 8 月, 鎌倉 山本なつ紀, 内山映子, 永田智子. 都市部団地居住者の社会的フレイルの現状と男女別の比較（示説）. 日本在宅ケア学会学術集会, 2024 年 8 月, 鎌倉 加藤 由希子, 篠崎 智大, 杉山 大典, 田口 敦子, 永田 智子. 生後 6 ヶ月以上 5 歳未満の子を育てる保護者の子に対する新型コロナワクチン接種受容と信頼できる情報源およびヘルスリテラシーとの関連（示説）. ヘルスコミュニケーションウィーク, 2024 年 9 月, 横浜 加藤由希子, 杉山大典, 田口敦子, 永田智子. 生後 6 か月以上 5 歳未満の子を持つ保護者の子への新型コロナワクチン躊躇と関連要因（口演）. 日本公衆衛生学会学術集会, 2024 年 10 月, 札幌 富崎悦子, 坂井志麻, 松浦志野, 深堀浩樹, 内山映子, 真志田祐理子, 山本なつ紀, 大河原啓文, 永田智子. 誰もが落ち着いて過ごせる「居場所」づくりを推進するためにー東京都と大学の共同事業から（交流集会）. 第 44 回日本看護科学学会学術集会, 2024 年 12 月, 熊本		

書籍

- 永田智子，田口敦子．外来で始める在宅療養支援 第2版：ニーズ把握・仕組みづくり・実践のポイント．日本看護協会出版会，2024
- 村嶋幸代，永田智子．高齢者の退院支援．大内尉義（編集）標準 PT/OT 老年学第6版，369-374，2024
- 永田智子．地域社会と地域保健．辻一郎（監修）．シンプル衛生学公衆衛生学 2025，221-226，2025．

社会貢献活動

- ・第29回日本在宅ケア学会学術集会における市民公開講座「「住み慣れた自宅で最期まで…」をかなえるために ～在宅ケアのすゝめ～」の企画・座長（講師 大蔵暢氏、ゲスト 大竹しのぶ氏
- ・地域の縁側である「もののきの家」における「慶應大学看護医療学部在宅看護プレゼツ 一緒に考える健康な暮らし」シリーズの企画（山本なつ紀先生、水井翠先生とともに）

氏名：バティ, アーロン	職位：教授	分野：自然言語
2024 年度の研究活動の概要 ● 第二言語習得とリスニングに関する書籍編集の複数年にわたるプロジェクトを完了 ● 英語接辞の難易度に関する研究を継続 ● 手話評価に関する研究を実施 ● 言語評価研究コミュニティにおいて活動を継続		
キーワード 応用言語学、言語試験、第二言語語彙、多層ラッシュモデル		
研究業績・活動 研究活動 ● 第二言語習得とリスニングに関する書籍編集の複数年にわたるプロジェクトを完了 ● 英語接辞の難易度に関する研究を継続 ● 手話の自動評価に関する研究を実施 ● <i>Language Testing</i> および <i>Language Assessment Quarterly</i> の編集諮問委員を継続務めた ● International Language Testing Association (ILTA) の Best Article Award 委員を務めた ● クイーンズランド大学の同僚に対し、新しい語彙評価手法に関する専門的助言を提供 ● 第二言語のリスニング評価における映像教材活用についての学術書の章を共同執筆（後日刊行予定） 研究成果物 Batty, A. O. (2025). Book review: Meaningful language test scores: Research to enhance score interpretation. <i>Language Testing</i>, 42(1), 114–123. https://doi.org/10.1177/02655322241259211 Batty, A. O., & Suvorov, R. (2024). Visual cues and listening. In E. Wagner, A. O. Batty, & E. Galaczi (Eds.), <i>The Routledge handbook of second language acquisition and listening</i> (pp. 307–318). Routledge. https://doi.org/10.4324/9781003219552 Holzknacht, F., Tornay, S., Battisti, A., Batty, A. O., Tissi, K., Haug, T., & Ebling, S. (2024). Automated sign language vocabulary assessment: Comparing human and machine ratings and studying learner perceptions. <i>Language Assessment Quarterly</i>, 21(3), 245–265. https://doi.org/10.1080/15434303.2024.2364877 Wagner, E., Batty, A. O., & Galaczi, E. (Eds.). (2024). <i>The Routledge handbook of second language acquisition and listening</i>. Routledge. https://doi.org/10.4324/9781003219552		

氏名：平野 優子	職位：助教	分野：地域看護学
2024 年度の研究活動の概要 ※1-3) 筆者が研究代表 4-8)他の教員が研究代表 1)侵襲的人工呼吸器装着 ALS 患者の病い経験とレジリエンスに関する縦断的研究（慶應 SFC 学会研究助成(2023)）：データ分析と学会発表、論文投稿 2)侵襲的人工呼吸器装着 ALS 患者と家族ペアでのライフ経験把握とレジリエンス促進要因の探索に関する研究（科研費基盤 C(2023～2025)）：調査とデータ分析、学会発表 3)COVID-19 感染症流行下の母親の妊娠期から子育て期の経験とレジリエンス促進要因の解明に関する研究（福澤基金(2023)）：データ分析と学会発表、論文執筆 4)ICT活用による保健師活動評価手法開発及びPDCAサイクル推進に資する研究（厚労科研：田口敦子教授代表）：保健師実践用語標準マスターの構造と内容の検討等 5)ライフヒストリー法による援助要請しない地域在住高齢者への社会的孤立予防策の探求（科研費萌芽研究：田口敦子教授代表）：インタビュー調査とデータ分析、文献検討 6)大規模団地におけるVUCA時代の全世代対応型孤立化予防研究（科研費基盤C：石川志麻専任講師代表）：フィールドワーク、学会発表 7)A 自治体の事業者等と連携した食環境づくり（委託研究：田口敦子教授代表）：フィールドワーク、カスタマージャーニーマップのワークショップ、学会発表 8)B 企業の若手社員の働きやすい職場環境づくりに関する研究（共同研究：田口敦子教授代表）：インタビュー調査とデータ分析		
キーワード ライフ経験，ポジティブ心理学，レジリエンス，ライフ・ライン・メソッド，援助要請，筋萎縮性側索硬化症，母親		
研究業績・活動 【論文】 ・平野優子，地域看護に活用できるインデックス連載記事「レジリエンス」，日本地域看護学会誌，27(2)，23-30，2024. ・他、筆者が筆頭以外の共著 3 件 【学会発表】 ・平野優子，侵襲的人工呼吸器装着 ALS 患者の COVID19 感染流行期を含む 14 年間の心理的状態の変化と関連要因に関する縦断的研究，第 27 回日本地域看護学会学術集会；2024 jun29-30；宮城. ・平野優子，秋山美紀，大生定義．侵襲的人工呼吸器装着 ALS 患者と家族ペア 3 事例における発症後の心理的状態の変化と関連要因．第 29 回日本在宅ケア学会学術集会；2024 aug24-25；神奈川. ・平野優子，秋山美紀，大生定義．侵襲的人工呼吸器装着 ALS 患者と家族における ALS 発症から現在までのレジリエンスと抑うつに影響を及ぼす医療・福祉・行政関係者との関わりの経験．第 16 回ヘルスコミュニケーションウィーク；2024 sep28-29；神奈川. ・平野優子，石井忍．COVID19 感染流行下の母親の妊娠期から子育て期の経験とレジリエンス促進要因．第 83 回日本公衆衛生学会総会；2024 oct29-31；北海道. ・他、筆者が筆頭以外の共著 4 件 【受賞】 ・第 29 回日本在宅ケア学会学術集会 優秀演題賞受賞 2024 年 8 月 平野優子，秋山美紀，大生定義．侵襲的人工呼吸器装着 ALS 患者と家族ペア 3 事例における発症後の心理的状態の変化と関連要因. 【社会貢献活動】 ・日本公衆衛生学会誌 査読委員 ・日本公衆衛生看護学会 実践ガイドライン委員		

氏名： 深堀 浩樹	職位：教授	
2024 年度の研究活動の概要 高齢者施設におけるケアの質の改善を目指した研究を主として、居場所づくり、家族介護者支援、歯科領域との協働、在宅ケア教育における Virtual Reality の活用、看護学における Evidence-Based Practice (EBP) ・データベースの利活用などに学際的、国際的活動も含み取り組むことができた。以下、それぞれの研究活動を説明する。 1. 研究代表者である科学研究費補助金基盤研究(B)「<u>高齢者施設・住まいにおける避けられる救急搬送・入院を削減する複雑介入の開発</u>」において、作成した介入ツールの実現可能性を検討するために、認知インタビューを実施した。 2. 東京都と慶應義塾大学・上智大学・順天堂大学による共同事業により、誰もが安心して過ごせる「<u>居場所</u>」を地域社会につくるためのハンドブックを作成した。 3. 国立保健医療科学院の研究者らとともに、<u>家族介護者支援</u>に関するシンポジウムを日本公衆衛生学会にて企画した。 4. 日本老年歯科医学会による令和6年度老人保健健康増進等事業「<u>訪問系及び短期入所サービスにおける口腔の連携強化に関する調査研究事業</u>」に<u>看護学の立場のオブザーバー</u>として貢献した。 5. ファイザーヘルスリサーチ振興財団 2024 年度研究助成（国際共同研究）に採択され、「<u>海外の医療系学生・医療者を対象とする日本在宅ケアの仮想現実教育プログラムの開発</u>」を開始した。 6. その他、国内外の共同研究者や健康マネジメント研究科看護学専攻で後期博士課程の大学院生との研究や、EBP や看護学におけるデータベースの利活用に関する共同研究を行った。学際的・国際的共同研究として、<u>作業療法・哲学・医学</u>の研究者、<u>米国、シンガポール</u>の研究者らとの研究を行った。また、特別招聘教授（国際）の制度を活用して、喜吉テオ紘子氏（米国）、Max Topaz 氏（米国）らと共同研究の可能性を検討した。		
キーワード 高齢者施設・住まい、回避可能な救急搬送、居場所、Virtual Reality		
研究業績・活動 【論文】 1. Anderson, J. G., Chesla, C. A., <u>Fukahori, H.</u>, Sakka, M., Honda, J., & Ikeda, M. (2024). Japanese and U.S. cultural exchange: Caring for aging family members in the community. Journal of Family Nursing, 30(1), 3-6. https://doi.org/10.1177/10748407231222687 2. 原 あずみ, 池田 真理, <u>深堀 浩樹</u>, 加澤 佳奈, & 吉永 尚紀. (2024). COVID-19 拡大状況下における看護系大学教員の研究活動上の肯定的変化：Web 調査の自由記述の質的内容分析. 日本看護科学会誌, 44, 442-451. https://doi.org/10.5630/jans.44.442		

3. Hirooka, K., **Fukahori, H.**, Ninomiya, A., Fukui, S., Takahashi, K., Anzai, T., & Ishibashi, T. (2024). Impact of family involvement and an advance directive to not hospitalize on hospital transfers of residents in long-term care facilities. *Archives of Gerontology and Geriatrics*, 117, 105183. <https://doi.org/10.1016/j.archger.2023.105183>
4. Iwasaki, Y., **Fukahori, H.**, Okumura-Hiroshige, A., Sakai, I., Inoue, S., Sugiyama, T., Nasu, K., & Ogawara, H. (2024). Family caregivers' needs in long-term care facilities: A descriptive qualitative study. *Research in Gerontological Nursing*, 17(4), 177–187. <https://doi.org/10.3928/19404921-20240614-01>
5. Maruyama, S., Hirose, T., Miyamoto, R., Mashida, Y., **Fukahori, H.**, & Bontje, P. (2024). The influence of case-based learning on clinical reasoning of new graduate occupational therapists. *Journal of Occupational Therapy Education*, 8(4), 12.
6. Mitani, S., Ogawara, H., Haruta, J., Sakakibara, T., & **Fukahori, H.** (2024). Characteristics of the studies using realist evaluation to assess interventions that address psychosocial healthcare issues in older adults: a scoping review. *BMJ Open*, 14(8), e078256. <https://doi.org/10.1136/bmjopen-2023-078256>
7. Mitani, S., Ogawara, H., Miyagawa, S., Doorenbos, A. Z., & **Fukahori, H.** (2025). Theory development of under what circumstances and what works for promoting disaster preparedness among long-term care facility (LTCF) stakeholders: protocol for realist review. *BMJ Open*, 15(3), e087837. <https://doi.org/10.1136/bmjopen-2024-087837>
8. Miyagawa, S., Urata, Y., Watanabe, S., Sugihara, H., Mitani, S., **Fukahori, H.**, & Topaz, M. (2024). The safety implications of information technology in nursing: Japanese incident data analysis. *Studies in Health Technology and Informatics*, 315, 69–73. <https://doi.org/10.3233/SHTI240108>
9. Miyashita, M., Nonaka, M., Aoyama, M., Nakanishi, M., Yamakawa, M., **Fukahori, H.**, Sato, K., Takahashi, Z., Nagae, H., & Morita, T. (2025). Concept of good death in people with dementia: a cross-sectional questionnaire survey of bereaved family members and medical professionals. *Psychogeriatrics*, 25(2), e70015. <https://doi.org/10.1111/psyg.70015>
10. Ng, W. H. D., Ang, W. H. D., **Fukahori, H.**, Goh, Y. S., Lim, W. S., Siah, C. J. R., Seah, B., & Liaw, S. Y. (2024). Virtual reality-based reminiscence therapy for older adults to improve psychological well-being and cognition: A systematic review. *Journal of Clinical Nursing*. <https://doi.org/10.1111/jocn.17375>
11. Ogawara, H., **Fukahori, H.**, Mashida, Y., Matsumoto, S., Nasu, K., & Doorenbos, A. Z. (2025). Nursing practice for early detection of long-term care resident deterioration: A qualitative study. *International Journal of Older People*

Nursing, 20(2), e70014. <https://doi.org/10.1111/opn.70014>

12. Tomotaki, A., Sakai, I., Fukahori, H., & Tsuda, Y. (2024). Evaluation of an evidence-based practice education workshop focused on critical appraisal for advanced practice nurses: A before-after intervention study. BMC Medical Education, 24(1), 1351. <https://doi.org/10.1186/s12909-024-06315-z>
13. Topaz, M., Peltonen, L. M., Michalowski, M., Stiglic, G., Ronquillo, C., Pruinelli, L., Song, J., O'Connor, S., Miyagawa, S., & Fukahori, H. (2025). The ChatGPT effect: Nursing education and generative artificial intelligence. Journal of Nursing Education, 64(6), e40-e43. <https://doi.org/10.3928/01484834-20240126-01>

【学会発表（筆頭演者のみ）】

1. 深堀 浩樹. (2024). ケアを支える多様な家族への支援をどう考えていくか-社会的基盤と支援実践の強化に向けて：高齢者施設の入居者の家族介護者への支援. 日本公衆衛生学会総会抄録集, 83 回, 154.

【書籍】

1. 水谷信子, 水野敏子, 高山成子（監修）, 三重野英子, 會田信子, 深堀浩樹（編集）. 「最新老年看護学 第4版」（2024年版）. 日本看護協会出版会.

【その他 特記事項】

1. 誰もが安心して過ごせる「居場所」を地域社会につくるためのハンドブック作成. 令和6年度 東京都と大学との共同事業（東京都公式HPにて2025年3月27日付プレスリリース掲載）. <https://www.metro.tokyo.lg.jp/information/press/2025/03/2025032725>
2. 深堀・宮川・秋元・真志田研究室(2024). 「超高齢社会における看護・データサイエンス・テクノロジー活用」SFC 万学博覧会 2024, Open Research Forum 展示.

【参考】研究活動の客観的評価

2025年度に行った東南アジアや米国の看護学研究者との交流の中で、研究活動の客観的評価について話題に上ることがあったため、自己評価の一環として記載する。

2025年8月時点（本稿提出）での研究活動の客観評価として、Scopus(Elsevier)によると、h-index:15, 文献数:70編, 被引用数:635, Co-authors:206人、被引用数トップ25%文献:21.8%、トップ25%ジャーナル掲載文献:60.4%、であった。SciValによる論文に基づく研究テーマの上位3つはNursing 65.5%, Medicine 38.2%, Social Science 9.1%であった。医学中央雑誌によると原著論文に限定した論文数は55編だった。

氏名： 福井 里佳	職位： 准教授	分野： 基礎看護学 看護教育学
2024 年度の研究活動の概要 1. 看護学実習における教員の学生理解と患者中心の看護に向けての支援 本研究は、日本学術振興会科学研究助成事業（若手研究課題番号 18K17436）の助成を受けて実施した。看護学実習において学生が患者中心の看護を行うために、教員が学生の患者理解をどのようにとらえ、「患者中心」の看護への学習支援をどのように行っているのかを明らかにすることを目的に、追加で収集した研究参加者のインタビューデータを含めて質的記述的分析を行い、最終年度の総括を行った。 2. 看護基礎教育における生活援助技術学習の支援 2024 年度学事振興資金（共同研究）（研究課題名：生活援助技術教育におけるアクティブラーニングの活用に関するスコーピングレビュー、研究代表者：松寄愛、共同研究者：福井里佳 三浦桃子）の助成を受けて実施した。看護基礎教育においてアクティブラーニングを活用した生活援助技術教育の動向や内容、方法、学習効果、活用する上での困難さを概観することにより、導入する上での示唆を得るために、PRISMA-ScR に則って、スコーピングレビューを実施し、第 28 回 East Asian Forum of Nursing Scholars で E-poster 発表を行った。		
キーワード 看護基礎教育 看護学実習 学生理解 生活援助技術 教育方法		
研究業績・活動 【学会発表】 Matsuzaki, A., Fukui, R., & Miura, M. (2025) . The utilization of active learning in nursing skills education on patients' daily living care for undergraduate students: A scoping review. 15 th International Nursing Conference & 28 th East Asian Forum on Nursing Scholars, Feb 13-14, Seoul, Korea.		

氏名： 藤井 千枝子	職位：教授	分野： 看護・医療統合
2024 年度の研究活動の概要 最近の研究活動については慶應義塾研究者情報データベース（KRIS）や、resarchmap をご確認ください。 K-RIS: https://www.k-ris.keio.ac.jp/html/100012727_ja.html Researchmap: https://researchmap.jp/FujiiC		
キーワード		
研究業績・活動		

氏名： 藤屋 リカ	職位： 准教授	分野： グローバルヘルス
2024 年度の研究活動の概要 慢性紛争下を生きる青少年のヘルスリテラシー向上：混合研究法による教育ツール開発（基盤研究 B）を 4 年計画の 2 年度として研究に取り組んだ。UNICEF の MULTIPLE INDICATOR CLUSTER SURVEYS (MICS) データを用いた共同研究の結果をまとめ、学会で発表した。また、ケニアとカンボジアにおいて、Photovoice 法を用いた研究にも取り組み始めた。		
キーワード ヘルスリテラシー、学校保健、母子保健、リプロダクティブヘルス、プライマリーヘルスケア、健康格差の是正、パレスチナ、COVID-19、Photovoice 法		
研究業績・活動 <論文・著書> Sarhan MBA, Fujiya R, Jimba M, Giacaman R, Kiriya J, Shibamura A. Exposure to violence and other determinants of health literacy among Palestinian adolescents: a cross-sectional study. BMC Public Health. 2024 Dec 18;24(1):3460. doi: 10.1186/s12889-024-20942-7. Sarhan MBA, Basha H, Giacaman R, Jimba M, Fujiya R. Palestinian university students' perspectives on COVID-19 risk and remote learning during the pandemic: A qualitative photovoice study. PLoS One. 2024 Oct 11;19(10):e0311972. doi: 10.1371/journal.pone.0311972. Sarhan MBA, Fujiya R, Giacaman R, Jimba M. Improving the health literacy of young refugees. Lancet. 2024 Jul 13;404(10448):121-122. doi: 10.1016/S0140-6736(23)01801-9. 藤屋リカ. ガザの女性たち. 「ガザ虐殺を考える：その悲痛で不条理な歴史と現状を知るために」 論創社, 215-228, 2024. 藤屋リカ. 「封鎖」以前のガザ. 「パレスチナ／イスラエルの＜いま＞を知るための 24 章」 明石書店, 10-19, 2024. 藤屋リカ. ガザへの視線 パレスチナの人々と共に学んだ日々. 三田評論 1287, 62-63, 2024. <学会発表> Fuse R, Fujiya R, et al. Trends and factors associated with contraception among married Palestinian women: A cross-sectional study from MICS 2010, 2014, and 2019/2020. CHILDREN'S LIVES: INTERNATIONAL CONFERENCE ON CHILDREN AND THEIR FAMILIES USING THE MULTIPLE INDICATOR CLUSTER SURVEYS (MICS). Sep 2024. Bristol, UK and Online. Wakabayashi N, Fujiya N, et al. Absenteeism Due to Menstruation and Its Associated Factors in The State of Palestine: A Cross-sectional Study of 2019/2020 Multiple Indicator Cluster Surveys (MICS). Joint Congress on Global Health 2024. Nov 2024, Okinawa, Japan.		

氏名： 細坂 泰子	職位：教授	分野：母性看護学／助産学
2024 年度の研究活動の概要 1. 国際・学際横断的連携による虐待に移行させない子育て支援モデルの構築 2. 分娩時の助産師との連携に対する医師の認識 3. 妊娠中期の身体活動量が及ぼす妊娠後期の腰痛への影響 4. 子どもの体験格差		
キーワード 子育て支援、しつけと虐待の境界、助産師と医師の連携、妊婦の腰痛、子どもの体験格差		
研究業績・活動 1. 日英でデータを収集し、Stress and Frustration as Triggers for Harsh Discipline、Differences in Cultural and Normative Perceptions of Discipline、The Pandemic's Impact に焦点化して分析した。研究結果は 2025 年度に国際学会で口頭発表の予定であり、国際誌に投稿予定である。 2. 安全で安心な分娩の維持が困難となりつつある現在の周産期分野では、これまで以上に医師と助産師の連携が必須である。そのため分娩ケアに関わる際に産科医は助産師にどのような認識を持ち、分娩に携わっているのか、医師側の認識を明らかにすることで課題を明確にした。2024 年度に論文掲載された。 3. 妊娠中期の身体活動量（運動量と生活活動量を合わせたもの）が妊娠後期の腰痛と日常生活の困難度に与える影響を明らかにした。23 メッツ・時/週以上の中強度以上の身体活動や 8000 歩/日以上の上り歩行、低強度の身体活動時間が多いと、腰痛悪化の程度が有意に低く、非妊娠時の BMI がやせに該当したり、体重増加量が大きいと有意に高かった。日常生活における身体活動量を増やす工夫をすることで腰痛を軽減できる可能性が示唆された。2024 年度に論文掲載された。 4. 子どもたちの成長に不可欠な体験機会に不平等が生じている現象は「体験格差」として認識され、重要な社会問題として注目されている。この格差を減らすために保育施設等での課外活動の評価について保育施設企業および多様な体験を提供する企業と研究を検討している。 主な業績等は https://researchmap.jp/hososaka を参照してください。		

氏名： 真志田 祐理子	職位：助教	分野： 老年看護学
2024 年度の研究活動の概要 2024 年度は、高齢者の価値観共有ツールや、介護・看護職連携支援ツールの開発、地域住民の居場所づくり支援を中心に、多岐にわたる研究活動を行い、高齢者ケアの質向上や教育・実践の体制の整備に資する取り組みを進めた。 1. 複数の慢性疾患を抱える高齢者の価値観共有ツールの開発 高齢者が自身の健康に関する価値観を簡便に記録し、医療従事者等と共有可能にするアプリケーションの開発を目指し、取り組みを進めている。2024 年度は、米国で使用されている、複数の慢性疾患を有する高齢者の価値観を可視化するツールの日本語版作成に向け、翻訳作業を実施した。 2. 高齢者の生きがいのある生活のためのテクノロジー利用ニーズに関する研究 地域在住高齢者を対象に、生きがいのある生活のためのテクノロジー利用ニーズを明らかにすることを目的に、質的研究を実施し、その成果を第 29 回日本在宅ケア学会学術集会にて発表した。 3. 高齢者施設における看護職と介護職連携促進ツールの開発に関する研究 研究分担者として、高齢者施設・住まいからの避けられる救急搬送・入院を減らすことを目的としたツールの開発に携わっている。2024 年度は、入居者の体調不良時における介護職と看護職の連携を促進するツールの有用性、実行可能性、効果を検証するために認知インタビューを実施した。 4. 住民の居場所づくりのためのマニュアル作成 東京都と慶應義塾大学・上智大学・順天堂大学による共同事業に参画した。地域で「居場所」を運営している人々へのインタビューを通じて、「居場所」の運営の工夫や課題を整理し、誰もが安心して過ごせる「居場所」を地域社会につくるためのハンドブックを作成した。 5. 海外医療系学生・医療者向け日本在宅ケア仮想現実教育プログラム開発 日本の在宅ケアを学ぶ Virtual Reality(VR) プログラムの開発を目指す共同研究に参画し、既存コンテンツの英語化および小児版コンテンツの新規開発に携わっている。 6. 終末期ケアの質向上を目指したツール開発に関する研究 研究分担者として、エンドオブライフ期に本人の意思を尊重したケアを提供するためのアセスメントツールのアプリケーション化に取り組んでいる。2024 年度は、同ツールの紙面版を使用している高齢者施設において試作版アプリを実際に使用してもらい、アンケート調査を実施した。 7. 看護学におけるデータベース構築・利活用に関する調査 プロジェクトメンバーとして、日本看護系協議会会員学会を対象とする、看護学におけるデータベース構築やデータベース利活用を促進するための調査に携わった。 8. 事例検討が卒作業療法士の臨床推論に与える影響に関する研究 研究協力者として、事例検討が新卒作業療法士の臨床推論に与える影響に関する調査研究に参画している。		
キーワード 高齢者、価値観、テクノロジー利用ニーズ、居場所、高齢者施設・住まい		

研究業績・活動

【論文】

1. Maruyama S., Hirose T., Miyamoto R., Mashida Y., Fukahori H., Bontje P. (2024). The influence of case-based learning on clinical reasoning of new graduate occupational therapists. *Journal of Occupational Therapy Education*, 8(4), 12.
2. Ogawara H., Fukahori H., Mashida Y., Matsumoto S., Nasu K., Doorenbos A. Z. (2025). Nursing practice for early detection of long-term care resident deterioration: A qualitative study. *International Journal of Older People Nursing*, 20(2), e70014.

【学会発表】

- ・ 真志田祐理子, 深堀浩樹, 宮川祥子, 新井康通(2024). 「地域在住高齢者の生きがいのある生活に向けたテクノロジー利用ニーズ」第29回日本在宅ケア学会学術集会.
- ・ Nakagami G., Morita K., Hayashida K., Akiyama T., Fukahori H., Yasaka T., Yamana H., Kugai H., Tomotaki A., Kita S., Zhang J., Akimoto N., Mashida Y., Miyagawa S., Yokota S., Haruna M., Igarashi A., Inagaki-Asano A., Isobe T., Inoue M., Takahashi Y., Nakano Y., Hayao H., Yasunaga H., Ikeda M. (2024). Research Project for Developing a Real-World Database (RWDB) for Nursing Policy Evaluation to Improve the Quality of Nursing Care. UTokyo Nursing International Conference 2024.

【ワークショップ・交流集会】

- ・ ワークショップ「望む場所で暮らし続けるための移動・外出支援」（座長：丸山祥, 真志田祐理子／講師：竹井隆晟, 永島匡, 山田雅司, 勝勇樹, 齋藤恵）第29回日本在宅ケア学会学術集会(2024).
- ・ 学生向け企画「Meet the expert! そこが知りたい在宅ケア」（企画・運営）第29回日本在宅ケア学会学術集会(2024).
- ・ 交流集会「誰もが落ち着いて過ごせる「居場所」づくりを推進するために：東京都と大学の共同事業から」（富崎悦子, 坂井志麻, 松浦志野, 深堀浩樹, 内山映子, 真志田祐理子, 山本なつ紀, 大河原啓文, 永田智子）. 第44回日本看護科学学会学術集会(2024).

【書籍】

- ・ 水谷信子, 水野敏子, 高山成子（監修）, 三重野英子, 會田信子, 深堀浩樹（編集）. 第1章D分担執筆：真志田祐理子, 深堀浩樹. 「最新老年看護学 第4版」（2024年版）. 日本看護協会出版会.

【その他】

- ・ 誰もが安心して過ごせる「居場所」を地域社会につくるためのハンドブック作成. 令和6年度 東京都と大学との共同事業（東京都公式HPにて2025年3月27日付プレスリリース掲載）.
<https://www.metro.tokyo.lg.jp/information/press/2025/03/2025032725>
- ・ 深堀・宮川・秋元・真志田研究室(2024). 「超高齢社会における看護・データサイエンス・テクノロジー活用」SFC万学博覧会2024, Open Research Forum 展示.

氏名：増田 真也	職位：教授	分野：ヒューマンケアリング
2024 年度の研究活動の概要 2024 年度は、ウェブ調査を実施し、その結果を分析した。また来年度に実施する調査の準備を進めた。		
キーワード ウェブ調査、回答の質、調査実験		
研究業績・活動 吉村治正・増田真也・正司哲朗 著 (2025). 大学生のためのウェブ調査入門 ― 社会科学からみた設計と実装 ― (慶應義塾大学出版会) 増田真也・澁谷泰秀・村上史朗・吉村治正 (2024). 幸福感の評定への“中央は典型” ヒューリスティックの影響 日本心理学会第 88 回大会 (熊本城ホール, 2024 年 9 月 6 日, ポスター発表) 増田真也 (2024). ウェブ調査はカス因子を増やすのか 日本心理学会第 88 回大会 (熊本城ホール, 2024 年 9 月 7 日, 公募シンポジウム「Web 調査の設計と分析」指定討論) 高橋雄介・荒井清佳・増田真也・尾崎幸謙・登藤直弥 (2024). 調査への回答の偏りを理解する・検出する・調整する 教育心理学年報, 63, 322-332. 増田真也 (2024). Web 調査の項目設計―たかが中間選択、されど・・・ 心理学ワールド, 107, 23-25.		

氏名：松 寄 愛	職位：専任講師	分野：基礎看護学
2024 年度の研究活動の概要 1. 手術室入室から全身麻酔導入までの患者と看護師の相互作用—看護師の働きかけと患者の反応に焦点をあてて—をテーマとして、観察法とインタビュー法を用いてデータ収集を行った。そのデータの分析をテーマ分析の手法を用いて分析中である。 2. 学部学生に対する、生活援助技術に関する看護技術教育において、アクティブラーニングがどのように活用されているかについてスコーピングレビューを実施し、2025EAFONS にてポスター発表を行った。		
キーワード 手術看護、相互作用、テーマ分析、生活援助技術、アクティブラーニング		
研究業績・活動 ➤ 学会発表 1. Ai Matsuzaki, Rika Fukui, Momoko Miura. (2025). The utilization of active learning in nursing skills education on patients' daily living care for undergraduate students: A scoping review. 15th International Nursing Conference & 28th East Asian Forum of Nursing Scholars. ➤ 社会貢献活動 1. 坂本文子, 古島幸江, 亀田典宏, 宮本いずみ, 前田浩, 松寄愛, 江草摩耶, 岡崎大輔. 手術看護認定看護師フォローアップセミナー「事例研究の進め方」, 周術期看護研究会, 2024 年 5 月. 2. 松寄愛. 「人材育成におけるコーチング～面接技法について～」. 医療法人社団清心会, 人材創造プロジェクト, 2024 年 8 月. 3. 松寄愛. 「中国・日本手術室看護師交流会セミナー」. エム・シー・メディカル株式会社, 2024 年 10 月.		

氏名： 水 井 翠	職位：助教	分野： 在宅看護学
2024 年度の研究活動の概要 地域住民の健康支援と在宅ケアに関する研究活動を実施した。 - 藤沢市地域の縁側事業「もののきの家」にて、地域住民を対象とした全4回の健康講座を企画・実施した。 - JST COI-NEXT「誰もが参加し繋がることでウェルビーイングを実現する都市型ヘルスコモンズ共創拠点プロジェクト」において、『在宅療養者・ケア提供者間で共有できる電子在宅ケアノートの開発と効果検証』をテーマに、プロジェクトメンバーとして調査研究を行った。 - 訪問看護ステーションにおけるワーク・ライフ・バランスや職場文化と人材定着の関連を明らかにするため、2025 年度からの研究活動に向けて研究計画の立案と準備を進めた。		
キーワード 訪問看護、ICT 活用、ワーク・ライフ・バランス、職場文化、人材定着		
研究業績・活動 【学会】 第 29 回 日本在宅ケア学会学術集会において事務局業務を担当した。 【社会貢献活動】 藤沢市地域の縁側事業「もののきの家」において、地域住民が主体的に健康づくりに取り組むことを目的とした全 4 回の健康講座を企画・実施。地域住民の健康意識の向上と地域との交流促進に取り組んだ。		

氏名： 宮川 祥子	職位： 准教授	分野：
2024 年度の研究活動の概要 排泄ケアシミュレータの開発 災害時の保健医療福祉分野の情報マネジメントに関する研究 行政保健師の ICT 活用に関する研究		
キーワード ICT/DX/防災/理工学/情報学/看護/公衆衛生		
研究業績・活動 研究業績： 宮川祥子, 畑山満則, & 佐藤大. (2024 年). 令和 6 年能登半島地震における 1.5 次避難所の運営と課題. 自然災害科学, 43(3), 665-678. https://doi.org/10.24762/jndsj.43.3_665 Mao, Z., Suzuki, S., Wiranata, A., Zheng, Y., & Miyagawa, S. (2025). Bio-inspired circular soft actuators for simulating defecation process of human rectum. Journal of Artificial Organs, 28(2), 252-261. https://doi.org/10.1007/s10047-024-01477-5 Ozawa, N., Tomisaki, E., Sou, H., Miyagawa, S., Yoshioka, J., Horie, H., Kandatsu, A., Deguchi, N. K., & Soeda, E. (2025). A practical program for responding to epileptic seizures including buccal midazolam administration in schools: Effectiveness evaluation for Yogo teachers in Japan. Epilepsy & Behavior, 163, 110156. https://doi.org/10.1016/j.yebeh.2024.110156 Miyagawa, S., Urata, Y., Watanabe, S., Sugihara, H., Mitani, S., Fukahori, H., & Topaz, M. (2024). The Safety Implications of Information Technology in Nursing: Japanese Incident Data Analysis. In G. Strudwick, N. R. Hardiker, G. Rees, R. Cook, & Y. J. Lee (Eds.), Studies in Health Technology and Informatics. IOS Press. https://doi.org/10.3233/SHTI240108 Epilepsy & Behavior 2025 年 2 月 活動等： 令和 6 年能登半島地震における 1.5 次避難所での支援活動 2024 年ヘルスコミュニケーションウィーク実行委員 第 29 回日本在宅ケア学会学術集会企画委員		

氏名：山内 慶太	職位：教授	分野：健康科学・病態学
2024 年度の研究活動の概要： 研究テーマ：主に以下に大別される。 1)大規模レセプトデータを用いた高額医療費の分析 2)電子カルテデータ等の病院マネジメント向上への活用 3)健保組合のデータ(特定健診、レセプト等)の健康経営への活用 4)病院の組織管理に関する研究 5)自殺対策 6)公的統計ミクロデータの利活用に関する研究 7)初等中等教育段階におけるデータサイエンス教育プログラムの開発 8)慶應義塾史 上記研究テーマの 1)～6)は私の研究グループで大学院の学生や修了者と共に行っているもので、そのうちの一部を以下に紹介する。 1～3)については、協会けんぽ(全国健康保険協会)の委託研究、土木健保との共同研究、JMDC から提供を受けたレセプトデータを用いた研究等を進めた。 4)については、主に職場の組織学習に注目して研究を展開している。 5～6)については、革新的自殺研究推進プログラム「ポストコロナの自殺対策に資する統計等のミクロデータ利活用推進に関する研究」の実績も踏まえて看護医療学部校舎に設置されたオンサイト拠点を活用した分析を進めた。また JST の「SDGs の達成に向けた共創的研究開発プログラム:社会的孤立・孤独の予防と多様な社会的ネットワークの構築」のプロジェクトとして研究代表者：岡壇君の「行政・NPO の孤立・孤独対策現場知を支援する総合知に基づく学術体制構築」が採択され、相互に連携しながら展開している。 7)は、本年度が次年度から使用される中学校教科書の採択年であったことから、新教科書を精査した。その成果をもとに、統計的思考力の関する教育に関し各教科書の改善点、課題等を第 22 回統計・データサイエンス教育の方法論ワークショップにおいて説明した。 8)に関して、北里柴三郎を肖像とする新紙幣の導入にともなって北里先生に関する関心が高まっていることから、今までの研究の成果を踏まえて、塾生並びに教員の史跡巡り、新作オペラ等への協力をした。 8)に関する地域貢献としては、中津市と慶應義塾で進めているプロジェクトに参画し、再生古地図「まち歩きマップー福澤諭吉が生きた幕末の中津を歩こうー」(紙版・オンライン版)の制作に協力して来たが、4 月に完成した。その後も、4 月 27 日の同完成イベントをはじめ活用・普及についての協力、歴史的まち並みを生かした魅力創出等の取り組みにも協力している。 キーワード：ヘルスサービスリサーチ、メンタルヘルス、探索的データ解析		

研究成果・業績（論文・発表等）：

（論文）

Tomoki Kishi, Chie Sato, Keita Yamauchi, Clustering of restorative sleep and lifestyle habits in Japanese male working population. Discover Public Health. 21(90),2024.

渡辺真弓, 宗像舞, 山内慶太, 金井 Pak 雅子. 病院に勤務する看護職の超過勤務の要因. 日本看護科学会誌, 44, 308-316, 2024.

Yokoyama K, Akune Y, Katoh H, Bito S, Fujita Y, Goto R, Yamauchi K. A cost-effectiveness analysis of three surgical options for treating displaced femoral neck fractures in active older patients in Japan: A full economic evaluation. PLoS ONE 19(10): e0310974, 2024.

Uemura N, Nishida Y, Sasaki S, Yamada Y, Anzai T, Takahashi K, Yamauchi K, Katsukawa F. BMI trajectory of 8,155,894 Japanese adults from exhaustive health checkup data: the contributions of age-related changes in height and weight. International Journal of Obesity, 49, 742-745, 2025.

渡辺 真弓, 宗像 舞, 山内 慶太. 日本語版組織学習尺度の信頼性・妥当性の検証. 日本医療・病院管理学会誌, 62(1), 2-12, 2025.

（発表[一部]）

田上紀代美、山内慶太. 介護保険制度前後における家族介護者の生活構造の特徴：オンライン施設を利用した公的統計マイクロデータの利活用. 第19回日本応用老年学会大会, 2025.（優秀発表賞） 他

（その他[一部]）

山内慶太,「まち歩きマップ」から回遊の楽しい町中津へ, 福澤研究センター通信 (40) 2-3, 2024.

山内慶太,一貫教育でのBLS教育－命を救う,命の大切さを学ぼう,三田評論(1288), 2024

山内慶太,福澤諭吉をめぐる人々(その91)北里柴三郎,三田評論(1290),56-59,2024.

（講演[一部]）

山内慶太, 北里柴三郎と福澤諭吉, 第53回全国私立医科大学同窓会連絡会東部会, 2024.

山内慶太, 福澤諭吉の実学論が私達に示唆すること, 第38回日本泌尿器内視鏡・ロボティクス学会総会, 2024.

山内慶太,「データの活用」領域の改訂教科書内容の比較と課題, 第22回 統計・データサイエンス教育の方法論ワークショップ, 2025.

山内慶太「戦争とカレッジソング－塾歌、慶應讃歌にみる義塾社中の気概－」(第6回慶應連合三田会学びのウェブセミナー), 2024.

氏名： 山本 なつ紀	職位： 助教	分野： 在宅看護学
2024 年度の研究活動の概要 【セルフモニタリングデータ】 【COI-NEXT】 都市型ヘルスコモンズ共創拠点（HCCP）のプロジェクトの中で、在宅療養者のセルフモニタリングデータの記録・活用状況に関する調査を、訪問看護ステーションと在宅療養者本人・家族を対象に実施した。次年度は、この調査結果を踏まえ、セルフモニタリングデータの記録デバイス開発について検討する予定である。 【在宅看護における安全管理】 厚労科研（24GA0201）にて、訪問看護ステーションを対象に、現在の安全管理体制や事故等の発生状況、事故等に関する事例検討状況などについて調査を実施した。次年度は、調査結果を踏まえ、訪問看護ステーションでの安全管理体制などについて検討していく予定である。		
キーワード 在宅看護、安全管理、地域住民、セルフモニタリングデータ		
研究業績・活動 【論文】 Honda, C., & Yamamoto-Takiguchi, N. (2024). Association between obtaining injury prevention information and maternal and child health services during COVID-19. BMC health services research, 24(1), 275. 【解説・総説】 山本なつ紀, 内山映子, 永田智子. (2024). COVID-19 感染拡大が地域住民や地域活動に及ぼす影響とポストコロナ社会での住民主体型地域活動再興に向けた課題の検討. 医療の広場, 64(5), 17-20. 【学会発表】 山本なつ紀, 内山映子, 永田智子. (2024). 都市部団地居住者の社会的フレイルの現状と男女別の比較. 第 29 回日本在宅ケア学会学術集会. 【社会的な活動】 ①第 29 回日本在宅ケア学会学術集会 事務局・企画委員・シンポジウム座長 担当 ②地域の縁側「もんのきの家」での地域住民向けの健康教育活動		

氏名： 若林 那於	職位： 助教	分野： グローバルヘルス
2024 年度の研究活動の概要 2024 年度は国際学会での口頭・ポスター発表、論文執筆、フィールドワークへの参画と社会貢献活動を通して思春期、若年女性の性と生殖に関する健康について研究を進めた。現在は UNICEF のデータを用いて月経による社会活動からの除外（アブセンティーズム）について二次分析を進めており、論文投稿に向けた準備を行っている。また、ケニア・ナイロビにおいて、生理の貧困に取り組む国際 NGO を訪問し、教育ツールの開発と教育効果に関するインタビュー、フィールドワークを実施する予定である。		
キーワード 月経前症候群、生理の貧困、政治的暴力、パレスチナ難民、思春期		
研究業績・活動 << 学会発表 >> ・口頭発表 5 th MENA Region Adolescent Health Conference 「Premenstrual syndrome and its association with exposure to political violence, human insecurity, and well-being: A cross-sectional study among Palestinian adolescent refugees」 ・ポスター発表 Joint Congress on Global Health 2024 「Absenteeism Due to Menstruation and Its Associated Factors in The State of Palestine: A Cross-sectional Study of 2019/2020 Multiple Indicator Cluster Surveys (MICS)」 << 論文 >> ・「Premenstrual syndrome and its association with exposure to political violence, human insecurity, and well-being: A cross-sectional study among Palestinian adolescent refugees」 Reproductive Health 誌アクセプト、投稿準備中 << フィールドワーク・研究活動 >> ・ピッツバーグ大学リチャード・ヘンカー教授による Crisis Team Management 講習（カンボジア・シェムリアップ アンコール小児病院、対象：看護師・研修医）にファシリテーターとして参加 << 社会貢献活動 >> ・横浜市若年女性支援モデル事業活動の参加 公益財団法人横浜 YWCA と協働し健康相談、性感染症・月経に関する勉強会を実施		

氏名： 新井 康通	職位：教授	分野： 老年医学
2024 年度の研究活動の概要 百寿者、スーパーセンテナリアン（110 歳以上）の医学生物学的研究からわかった腎臓老化の仕組みについて総説をまとめた。また、85 歳以上の自立した高齢者（元気高齢者）の食事調査の結果をまとめて論文報告した。		
キーワード 百寿者、元気高齢者、バイオマーカー		
研究業績・活動 1. <u>Arai Y</u>, Yanagita M. Healthy ageing and the kidney – lessons from centenarians. Nat Rev Nephrol. 2024 Sep;20(9):558–559. doi: 10.1038/s41581-024-00860-y. 2. Ando T, Sasaki T, Abe Y, Nishimoto Y, Hirata T, Haruta J, <u>Arai Y</u>. Determinants of polydoctoring among multimorbid older adults; a cross-sectional study in an urban area of Japan. J Gen Fam Med. 2024 Sep 8;25(6):376–383. doi: 10.1002/jgf2.728. 3. Perri G, French C, Agostinis-Sobrinho C, Anand A, Antariano RD, <u>Arai Y</u>, Baur JA, Cauli O, Clivaz-Duc M, Colloca G, Demetriades C, de Lucia C, Di Gessa G, Diniz BS, Dotchin CL, Eaglestone G, Elliott BT, Espeland MA, Ferrucci L, Fisher J, Grammatopoulos DK, Hardiany NS, Hassan-Smith Z, Hastings WJ, Jain S, Joshi PK, Katsila T, Kemp GJ, Khaiyat OA, Lamming DW, Gallegos JL, Madeo F, Maier AB, Martin-Ruiz C, Martins IJ, Mathers JC, Mattin LR, Merchant RA, Moskalev A, Neytchev O, Ni Lochlainn M, Owen CM, Phillips SM, Pratt J, Prokopidis K, Rattray NJW, Rúa-Alonso M, Schomburg L, Scott D, Shyam S, Sillanpää E, Tan MMC, Teh R, Tobin SW, Vila-Chã CJ, Vorluni L, Weber D, Welch A, Wilson D, Wilson T, Zhao T, Philippou E, Korolchuk VI, Shannon OM. An Expert Consensus Statement on Biomarkers of Aging for Use in Intervention Studies. J Gerontol A Biol Sci Med Sci. 2025 Apr 7;80(5):glae297. doi: 10.1093/gerona/glae297. 4. Kurata H, Meguro S, Abe Y, Sasaki T, <u>Arai Y</u>, Hayashi K. Association of fish intake with all-cause mortality according to CRP levels or inflammation in older adults: a prospective cohort study. BMC Public Health. 2024 ;24(1):2822.		

氏名：新幡 智子	職位：専任講師	分野：慢性期・終末期看護学
2024 年度の研究活動の概要 ・ がん薬物療法を受ける消化器がんをもつ高齢者を対象に、症状クラスター・コピーング・QOLの影響要因を明らかにする縦断研究に参画し、データ分析や論文作成に取り組んだ。また、2次分析として、症状クラスターとフレイルとの関連について分析を進めた。 ・ がんと循環器疾患を併せもつ高齢者を対象に、セルフケアのニーズと QOL について明らかにすることを目的とした質問紙調査およびインタビュー調査に参画し、データ収集に取り組んだ。 ・ 抗凝固薬の内服によるリスクとベネフィットを可視化するツールの有効性の検証に関するプロジェクトに参画し、他職種とともに、データ収集や分析のプロセスに取り組んだ。 ・ 訪問看護師向けの在宅看取り教育の指導者用のプログラムの開発と有効性を検証することを目的としたプロジェクトに参画し、プログラムの評価を進め、学会発表や論文作成に携わった。		
キーワード がんサバイバー, 緩和ケア, がん薬物療法, フレイル		
研究業績・活動 ・ 下記の K-RIS のページをご参照ください。 https://kris-db.adst.keio.ac.jp/chk?d=%2Fhtml%2F100012750_ja.html		

氏名： 井上 真帆	職位：助教	分野：慢性期・終末期看護学
2024 年度の研究活動の概要 1. 造血幹細胞移植を受けた患者の食欲に関する研究 造血幹細胞移植後の外来通院患者における食欲低下の関連因子を明らかにした調査結果について、学会発表を行い、論文作成に取り組んだ。 2. 高齢がん患者の食生活と身体活動に着眼したがん・心血管セルフケアプログラムの有効性（基盤研究 B）（研究代表者：矢ヶ崎香教授） がんと心血管疾患を併せもつ高齢者を対象としたセルフケアのニーズと生活の質を明らかにする研究に、連携研究者として取り組み、質問紙調査およびインタビュー調査によるデータ収集を行った。		
キーワード がん看護、造血器腫瘍、造血幹細胞移植、食欲		
研究業績・活動 ➤ 学会発表 井上真帆，矢ヶ崎香．造血幹細胞移植後に外来通院患者している患者の食欲と主観的症状の関連：横断研究．第 39 回日本がん看護学会学術集会．2025 年 2 月 22 日．札幌． ➤ 書籍 井上真帆，矢ヶ崎香．血管炎・血管外漏出．勝俣範之・小野寺恵子（編）．がん薬物療法副作用対策ポケット辞典．東京．照林社．2025．pp.213-217.		

氏名：大坂 和可子	職位：准教授	分野：慢性期・終末期看護学
2024 年度の研究活動の概要 1. デイシジョンエイドの開発・評価に関する研究 乳房再建を考慮する乳がん患者に対するデイシジョンエイドを用いたシェアード・デイシジョンメイキング：クラスターランダム化比較試験の研究に参加した。2024 年度は研究代表者と協力してプロトコル論文作成した。 2. がん患者向けデイシジョンエイドを系統的に開発し活用できる医療者育成プログラムの開発に関する研究 2024 年度は、研究成果について論文をまとめ投稿した。 3. シェアード・デイシジョンメイキングおよびデイシジョンエイドの活用に関する阻害要因と促進要因に関する研究 2024 年度は、2023 年度に引き続き調査実施計画の検討を行った。また、シェアード・デイシジョンメイキングやデイシジョンエイドの普及に向けて、医療者にわかりやすく紹介する動画を作成し公開した。		
キーワード シェアード・デイシジョンメイキング、デイシジョンエイド、がん、意思決定支援、患者の主体性		
研究業績・活動 学会発表 ・ Wakako OSAKA, Yumi AOKI, Yuki YONEKURA, Hitomi DANYA, Kazuhiro NAKAYAMA. Design and acceptability of an online training program on the development and implementation of decision aids for Japanese healthcare providers. 12th International Shared Decision Making Conference. 2024 年 7 月 8 日 (Lausanne) ・ 青木 裕見, 大坂 和可子, 青木 頼子, 藤田 美保, 山本 加奈子, 江藤 亜矢子, 端山 淳子, 有森 直子, 中山 和弘. 交流集会 意思決定プロセス共有のための方略－価値観を明確にする『オタワ意思決定ガイド』を使ってみよう!, 第 44 回日本看護科学学会学術集会, 2024 年 12 月 7 日 (熊本). 書籍 ・ 大坂和可子 (2024). (分担執筆) 4 意思決定支援ツール (デイシジョンエイド) の 作成・活用 ②乳がん患者の手術方法に関するデイシジョンエイドの作成と活用. 実践 シェアード・デイシジョンメイキング 改題改訂第 2 版, 中山健夫, 藤本修平 編著, 66-83, 日本医事新報社, 東京. 雑誌 ・ 大坂和可子 (2025). ヘルスリテラシーを高めて意思決定を支援する. 特集【患者の思いを引き出して支え、力を高める意思決定支援】, 小澤桂子(編), がん看護, 30(2), 130-134.		

その他(講演)

- ・ 大坂和可子. 教育講演 18 ガイドラインで推奨された Decision Aids、質問促進リストの使い方「ガイドラインで推奨された Decision Aids の使い方」, 第 29 回日本緩和医療学会学術大会 第 37 回日本サイコオンコロジー学会総会 合同学術大会, 2024 年 6 月 15 日 (神戸) .
- ・ 大坂和可子. JCS 2025 HEPT (心不全緩和ケアトレーニングコース) セッション「意思決定支援をどう行っていくべきか? 循環器領域における Shared-decision making を深考する」特別講演, 第 89 回日本循環器学会学術集会, 2025 年 3 月 30 日 (横浜) .

氏名： 大和田 陽子	職位：助教	分野： 急性期看護学
2024 年度の研究活動の概要 1、急性期術後患者のせん妄に関する研究 2、高齢者の手術における意思決定支援に関する研究		
キーワード せん妄 高齢者 意思決定 急性期看護		
研究業績・活動 1、急性期術後患者のせん妄に関して、急性期における術後せん妄の発症リスク、診断基準、評価ツール、および非薬物療法に関する情報を収集した。 今後、文献レビューを通じて、術後せん妄の病態生理、リスク因子、予防戦略、看護介入の効果に関する既存の研究の限界と今後の研究の必要性を明確にし、研究に発展させていく。 2、高齢患者における外科手術の意思決定について、文献調査及び最新の関連研究動向の把握を行った。また、医療現場での課題抽出の為、ヒアリングや予備的な情報収集を実施した。 今後、研究計画書を作成し、倫理審査等の準備を進めていく。		

氏名：小澤 典子	職位：専任講師	分野：小児看護学
2024 年度の研究活動の概要 ・慢性疾患をもつ子どもの成人移行期支援について、子どもの親を含めた支援の検討を進めています。 ・てんかんをもちながら学校に通う子どもの支援として、学校の教職員を対象とした教育プログラムの構築に取り組んでいます。 ・看護大学生の精神的支援、NICU の子どもの看護についての検討も行っています。		
キーワード 小児看護学、小児がん、小児慢性疾患、てんかん、学校看護、教育プログラム		
研究業績・活動 [論文] ・ A practical program for responding to epileptic seizures including buccal midazolam administration in schools: Effectiveness evaluation for Yogo teachers in Japan. Noriko Ozawa, et al. Epilepsy & Behavior 163. 2025.2 ・ 医療的ケア児の在宅移行に向けた家族支援における NICU 看護師の実践と思考－施設における調査－. 後藤あゆみ, 涌水 理恵, 小澤典子. 家族看護学研究 30 76-86 2025. 3 ・ Factors Associated with Eating Disorder Tendency in University Students after the COVID-19 Pandemic . YAKABE, Mina, OZEKI, Manami, OZAWA, Noriko, MUTA, Rieko, YAMAMOTO, Kimiko, SUGAYA, Tomokazu. Asian Journal of Human Services 26 30-45. 2024.4 [学会発表] ・ Comparison of self-assessment and parental assessment of health literacy in children transiting to adulthood with hematologic and oncologic diseases Noriko Ozawa, et al. 56th Congress of the International Society of Pediatric Oncology, Honolulu, Hawaii, 2024 ・ 学校でのブコラム®口腔内投与を含むてんかん発作時の対応研修プログラムの構築－特別 支援学校養護教諭を対象とした効果検証－」 小澤 典子, 富崎 悦子, 宗 皓, 宮川 祥子, 吉岡 純希, 堀江 浩子, 神達 彩加, 出口奈緒子, 添田英津子. 第 71 回日本小児保健協会学術集会.2024.7 (若手奨励賞) その他の業績：https://researchmap.jp/7000025194		

氏名： 添田 英津子	職位： 准教授	分野： 小児看護学
2024 年度の研究活動の概要 1. 肝移植患児に対する移行期支援に関する研究 2. 教育ツール「小児看護ゲーム」の開発に関する研究 3. メディアと臓器移植に関する研究—映像メディアとソーシャルメディア		
キーワード 肝移植、小児看護、移行期支援、野外教育活動、ゲーム、メディア		
研究業績・活動 1. 肝移植患児に対する移行期支援に関する研究 2024 年度は、海外（米国・ピッツバーグ）で行われている野外教育活動に、我が国で肝移植を受けた子どもと学生とともに参加した。2025 年度、国内での野外教育活動実装の準備を整えた。 2. 教育ツール「小児看護ゲーム」の開発に関する研究 2023 年度に行った概念分析に基づき、ゲームをブラッシュアップし、その効果を評価する方法を検討した。 3. メディアと臓器移植に関する研究—映像メディアとソーシャルメディア 臓器移植法が施行された 1997 年前後（1996 年～1998 年）と 2024 年前後（2023 年～2025 年）の映像メディアを抽出し、分析する予定である。 <学会発表・論文など> 横田裕行、添田英津子、神田隆（2024）、【脳死について知る】脳死・臓器移植の明日を考える、Brain and Nerve：神経研究の進歩、77（4）、0301-0309 添田英津子（2024）、医療スタッフ・ニューカマーカモン、移植、59、229 小澤典子、富崎悦子、宗皓、吉岡純希、堀江浩子、神達彩加、出口奈緒子、添田英津子（2024）、小児保健研究、83、176 <社会活動> 公益社団法人 日本臓器移植ネットワーク 理事 日本移植・再生医療看護学会 理事長 一般社団法人 日本移植学会 評議員 日本肝移植学会 幹事 日本子宮移植研究会 理事		

氏名： 田村 紀子	職位：専任講師	分野：慢性期・終末期看護学
2024 年度の研究活動の概要 1. パーキンソン病患者の排便セルフケアに関する研究 2. VUCA 時代の看護管理能力を高めるケースメソッド教育プログラムの開発		
キーワード パーキンソン病、便秘、セルフケア、自己効力感、ケースメソッド教育		
研究業績・活動 1. 大学病院パーキンソン病センターにて、外来通院中のパーキンソン病患者の排便セルフケアに関するインタビュー調査を実施し、16 名のパーキンソン病患者の体験について分析を進めた。分析の途中経過を共同研究者である医師に報告し、2025 年度に開催されるパーキンソン病・運動障害疾患 kongress での発表準備を行った。前年度に続き、塾内学事振興資金（個人研究）による助成を受けた。次年度中に投稿する。 2. 昨年度に引き続き、研究代表者（小池智子准教授）の行う大学病院看護部の看護師長研修に参画し、ケースメソッド教育プログラムの教材作成と評価に携わった。院内での業務改革や、新規部署の設置に関するプロジェクトマネジメントに関して、関係者にヒアリングを行い、2 本のケース教材を作成した。 ・ 小池智子，加藤恵里子，内田智栄，宗廣妙子，勝又徳子，岡本陽子，田村紀子．看護管理能力を開発するケースメソッド教育プログラムの実施と評価．第 28 回日本看護管理学会学術集会，2024 年 8 月 23 日-24 日（名古屋）． この他、他大学の看護系教員との交流から、看護系大学教員のキャリア開発に関する調査研究に参画した。 ・ Satoh M., Sato N., Tamura N., Fujimura A. Psychological safety in enhancing the competence of nurse educators among early career nursing faculty in Japan: A cross-sectional study. International Journal of Nursing Studies Advances 7 (2024) 100254.		

氏名： 富崎 悦子	職位： 専任講師	分野： 小児保健
2024 年度の研究活動の概要 1. ブコラムの研修プログラムをブラッシュアップし、8 月に特別支援学校の教諭に向けて行った。今後効果を分析し、発表していく予定。 2. コンセプト学習についての勉強会をオンラインで Kimberly 先生をお迎えして 9 月に行った。今後、Giddens 先生の本を翻訳していく予定。 3. 居場所を作りたい人のためのハンドブックを作成。今後、工夫点などを論文としてまとめていく予定。 4. 多職種連携教育をまとめている。		
キーワード： 子どもの環境・医療的ケア児・CLS・コンセプト学習・多職種連携		
研究業績・活動 Tomisaki E, Haruta J, Horiguchi T, Arahata T, Fukui R, Uno S, Ando T, Yoshino T, Ishikawa S, Suzuki S, Yamaura K, Monkawa T. A Simulated Interprofessional Team Conference Using Cross-Training for Junior Healthcare Students in Interprofessional Education: a Qualitative Content Analysis. <i>Advances in Medical Education and Practice</i> . 2025;16:583 - 594. doi:10.2147//AMEP.S494541 Ozawa N, Tomisaki E, Sou H, Miyagawa S, Yoshioka J, Horie H, Kandatsu A, Kumada Deguchi A, Soeda E. A practical program for responding to epileptic seizures including buccal midazolam administration in schools: Effectiveness evaluation for Yogo teachers in Japan. <i>Epilepsy Behavior</i> . 2025;163:110156. doi: 10.1016/j.yebeh.2024.110156. Haruta J, Tomisaki E, Horiguchi T, Nakamura T, Ishikawa S, & Monkawa T. Interprofessional competency in clinical students: validating the Clinical student version of the Japanese Self-assessment Scale of Interprofessional Competency (C-JASSIC). <i>Journal of Interprofessional Care</i> 2024;38(5):875-882 doi: 10.1080/13561820.2024.2375292 Sawada Y, Tanaka E, Tomisaki E, Watanabe T, Okumura R, Kinoshita H, Ito S, Anme T. Active use of local exercise facilities can improve physical performance of community-dwelling older adults. <i>Journal of Physical Therapy Science</i> . 2024;36(6):325-329. doi: 10.1589/jpts.36.325.		

氏名： 野末 聖香	職位：教授	分野： 精神看護学
2024 年度の研究活動の概要 1. 心不全患者の睡眠とメンタルヘルスの改善を目指した遠隔看護の開発と効果検証 2. Covid-19 パンデミック下で活動する精神看護専門看護師のための支援ツールの開発 3. 心不全患者が日常生活に運動療法を取り入れる体験に関する質的研究 4. うつ病看護ガイドラインの改訂のための関連研究の分析 5. 看護コンサルテーションに関する研究・文献の分析		
キーワード リエゾン精神看護、精神看護専門看護師、睡眠障害、遠隔看護、うつ、心不全患者、看護ガイドライン		
研究業績・活動 1. Y Sato, K Nozue, D Sugiyama.(2024): Posttraumatic negative cognitions in nurses affected by the Great East Japan Earthquake: A longitudinal study two years after the nuclear power plant accident, Archives of Psychiatric Nursing, vol.53,51-60. 2. 野末聖香（2024）：看護の立場から次世代精神医学研究への期待,次世代精神医学研究のあり方ー知の統合による課題解決に向けてー,精神神経学雑誌,126(11),737-741 3.心不全患者の睡眠とメンタルヘルスの改善を目指した遠隔看護プログラムの介入効果に関する研究の継続 4.Covid-19 パンデミック下で活動した精神看護専門看護師に対するインタビュー調査の結果をもとに,パンデミックにおける精神看護専門看護師のための支援ツール作成の継続 5.循環器内科医師との共同研究において,アプリを活用した運動療法に取り組む心不全患者へのインタビュー調査の継続 6.日本うつ病学会,うつ病看護ガイドライン編著者としてガイドライン研修会の講師(2024.7.13) 7.日本うつ病学会,看護師のためのマインドフルネスとコンパッションワークショップ座長(2024.7.13) 8.日本精神保健看護学会,うつ病看護の原則とアセスメント,「うつ病看護ガイドライン」の活用方法と事例検討～講師(2024.6.2) 9.日本精神保健看護学会倫理利益相反委員会委員長として,学会の「利益相反(COI)に関する規程」(2024.7),「日本精神保健看護学会の倫理綱領」(2024.10)を作成し公表		

氏名： 朴 順禮	職位：専任講師	分野：
2024 年度の研究活動の概要 患者および家族、医療従事者への Well-being を目指す効果的な介入方法の研究・開発・実践・普及を推進するとともに、医療や社会へマインドフルネスとコンパッションによる心のケアの実践と普及を目指す。 1) 患者・家族および医療従事者へのマインドフルネス・コンパッションプログラムの研究開発 2) マインドフルネス、コンパッションに関する教育・普及活動		
キーワード マインドフルネス、コンパッション、レジリエンス、well-being		
研究業績・活動 (論文) ・ Mitsuhiro Sado, Akihiro Koreki, Akira Ninomiya, Chika Kurata, Sunre Park, Daisuke Fujisawa, et al. Cost-effectiveness analysis of mindfulness-based cognitive therapy in patients with anxiety disorders in secondary mental health care settings alongside a randomized controlled trial. Front Psychiatry. 2024 Oct 25;15:1391786 ・ Mari Takeuchi, Sunre Park. Mental Health Care among Cancer Patients with BRCA Gene Mutations: The Potential of Mindfulness-based Intervention. Keio J Med 2025 Feb 22 (発表・活動等) ・ 朴 順禮. マインドフルネス. 第 29 回日本緩和医療学会・第 37 回日本サイコオンコロジー学会. 2024. 6 ・ 朴 順禮、佐渡充洋他 ワークショップ: マインドフルネス認知療法 ―脱中心化に理論と実践の両面からアプローチする― 日本不安症学会日本認知療法・認知行動療法学会. 2024. 7 ・ 朴 順禮. 講演会「心とからだを整えるセルフケア法 マインドフルネスを使って」令和 6 年深川南部保健相談所. 2024. 7. 18 ・ 朴 順禮、山本和美. 研修会「身体疾患に対するマインドフルネス―心身症とがん患者のための MBSR/ MBCT による介入実践」日本マインドフルネス学会第 11 回大会. 2024. 10 ・ 山田成志、後藤菜穂、永岡麻貴、田村紀子、朴 順禮、藤澤大介、佐渡充洋. 医療者に対するマインドフルネス療法基礎ワークショップの実施可能性に関する研究. 日本マインドフルネス学会第 11 回大会 2024. 10 ・ 朴 順禮. 臨床におけるマインドフルネスに基づく介入の効果と実践について 第 29 回日本口腔顔面痛学会総会・学術大会. 2024, 11		

氏名：福田 紀子	職位：教授	分野：精神看護学
2024 年度の研究活動の概要 研究 1：パンデミック下で活動する精神看護専門看護師の支援ツールの開発 研究 2：心不全患者が日常生活に運動療法を取り入れる体験に関する質的研究 研究 3：難民の背景をもち日本で就労しているシリア人の社会的統合（仮題） 研究 4：循環器疾患患者を対象とした臨床研究への患者参画に影響を及ぼす障壁と社会実装への課題		
キーワード： リエゾン精神看護，精神看護専門看護師，睡眠障害，メンタルヘルス，心不全患者，質的研究		
研究業績・活動 以下の研究については全て共同研究として継続中である。 研究 1：パンデミックにおける精神看護専門看護師の支援ツールの作成に向けた文献検索と文献検討を進めている。 研究 2：アプリを活用した運動支援プログラムに参加した心不全患者へのインタビュー調査を実施。現在、論文投稿準備中である。 研究 3：難民を支援する外部団体研究者との共同研究プロジェクトにおいて、インタビュー調査を実施。論文にまとめて投稿準備中である。 研究 4：循環器外来に通院中の患者を対象にインタビュー調査によるデータ収集と分析を進めている。		

氏名：藤島 麻美	職位：助教	分野：急性期看護学
2024 年度の研究活動の概要 1. <u>大学の教育環境を活用した潜在看護師に対する復職支援プログラム</u> 潜在看護師に対する復職支援プログラムの開発と実施の効果を明らかにすることを目的とし、オンデマンドで学べる事前学習コンテンツと 1 日の対面研修の組み合わせによる復職支援プログラムを 2024 年 9 月に行い、参加者を対象としたアンケートとインタビュー調査によりその効果を検証した。本研究は SFC 研究所スタートアップ補助の助成を受けて行った。研究成果を第 35 回日本医学看護学教育学会学術集会にて発表した。実施 3 年目となるため、今後は蓄積したデータを論文化することを目標としている。 2. <u>成人期発症型喘息患者のセルフマネジメントを強化する看護支援モデルの開発</u> 2022 年に着手した研究であり、これまでに 12 名の患者に対して成人発症型喘息に対するセルフマネジメントについてインタビュー調査を行った。2024 年度は本研究の論文執筆と英文校正を行い、現在論文投稿中である。本研究は日本学術振興会 科学研究費助成事業 研究活動スタート支援の助成を受けて行った。 3. <u>脳神経外科領域における ERAS プログラムの開発に関する研究</u> 脳神経外科領域における ERAS (Enhanced Recovery After Surgery) について、文献レビューを通じてエビデンスを整理し、その有効性や課題について検討を進めている。臨地実習においても脳神経外科の周術期患者に対する早期回復のための看護支援につなげたいと考えている。		
キーワード 復職支援、潜在看護師、セルフマネジメント、喘息、脳神経外科、ERAS		
研究業績・活動 【学会発表】 藤島麻美,浅川翔子,武田祐子, 離職中の看護師が抱える復職を阻む要因～復職支援プログラムに参加した看護師の語りから～第 35 回日本医学看護学教育学会学術集会, 2025 年 3 月 8 日 【社会貢献活動】 潜在看護師に対する復職支援プログラムの実施, 2024 年 9 月 14 日 (土) 【Researchmap】 https://researchmap.jp/a-fuji 【K-RIS】 https://www.k-ris.keio.ac.jp/html/I00016597_ja.html		

氏名： 堀口 崇	職位：教授	分野： 急性期病態学
2024 年度の研究活動の概要 ① 臨床解剖学習が周術期看護の質に与える影響に関する研究 ② 病態生理を重視した急性期看護に関する研究 ③ 脳機能と解剖を融合した画像診断が急性期脳卒中看護に及ぼす影響に関する研究 ④ 若年者に生じる動脈硬化に対する看護師の介入に関する研究 ⑤ 失語症患者に対する多職種協働実践への示唆に関する研究 ⑥ 動脈硬化性疾患とがんが併存する患者の実態に関する研究		
キーワード 臨床解剖、病態生理学、画像診断、急性期看護、周術期看護、stroke-oncology		
研究業績・活動 解剖学教室と共同で、看護医療学部生第4学年の希望者数名に解剖見学を経験させた。頸部、胸部、腹部、骨盤腔内の系統解剖を行い、各臓器や部位の疾患や病態ならびに生理学を復習しつつ、看護実践への応用について議論した。実際に臓器に触れさせたり、体腔内の深さや広がりを実感させたりしたうえで、ドレーンの挿入部位や手術アプローチの方法、またその理論的背景を解説した。心臓、肝臓、腎臓などの実質臓器は断面を観察させ、CT やエコーなどの画像診断への応用について解説した。これらの体験が、実習で体験した症例にどのように役立つのか、これらの知識を得る前後で、看護の質に変化があるのかを検討させた。 第4学年のプロジェクトを通じて、「脳卒中看護に役立つ臨床症状から脳画像所見を予測する技能を獲得する学習過程の検討」を行った。「大脳皮質の機能局在」、「神経ネットワーク」、「血管支配領域」の3領域を統合し、同一スライス脳断面内で空間的広がりをもって把握できる学習ツールを作成させ、脳損傷症例の画像読影を行い、学習ツール使用前後で正答率の変化とその理由について解析させた。その結果、本研究を通して2次元画像を3次元構造に変換が可能となったこと、前述した3領域の知識の統合により、脳機能の総合的な理解ができたこと、が明らかとなった。本学習ツールは、脳画像読影方法を習得するうえで有用であると同時に、在宅療養の場などすぐに画像を撮影し、読影することができない環境での今後の症状予測や看護ケアの検討をする際に活用できると考えられた。 第4学年のプロジェクトを通じて、「小児から若年者の年代に起こる動脈硬化を予防するためのアプローチ方法の検討」を行った。関連する文献検討を行い、動脈硬化に関連する血管の病理学的変化は小児期から生じ、30歳代には進行していることと、小児における動脈硬化病変の発生には、遺伝的素因とエピジェネティクスが関与することが明らかとなった。結論として、小児から30歳代までの動脈硬化を予防するための3つの取り組みが重要であると考えた。①生活習慣を改善する：小児には食事指導を、15～30歳代の若年層には食生活改善や運動習慣の定着、禁煙・節酒指導が必要である。食生活改善では、トランス脂肪酸や飽和脂肪酸を減らし、日本食を基にした食事を推奨する。②女性のやせの割合を減らす：若年女性のやせの増加は、耐糖能異常の増加と次世代にお		

ける脂質蓄積の増加という二方向から動脈硬化病変の進行を促進するため、深刻かつ早期解決が必要である。SNS の影響による細身信仰が背景にあるため、国が主体となり、正しい健康情報を発信することが重要である。看護師は患者に対し、適切な体重管理や生活指導を行う役割を担う。③小児生活習慣病予防健診の標準化進め、格差を解消する：健診の内容や対象者、費用に地域格差があるため、標準化を進める必要がある。費用負担の一部を国や自治体、残りを保護者が分担する仕組みの構築が重要である。動脈硬化予防には、正しい知識の普及と生活習慣改善が鍵となるが、看護師だけでなく行政や企業など多分野の協力が不可欠であることが明らかとなった。

第4学年のプロジェクトおよび五年一貫コースを通じて、脳卒中患者に対する看護ケアのあり方について検討した。その結果、看護師と言語聴覚士という2つの専門職が、それぞれ個別に失語症患者に対する介入を行っている現状を知った。文献検討を行うと、看護師が失語症患者への対応に戸惑いを感じることがあり、情報収集中心の関わりが多くなってしまうことや、言語聴覚士との連携機会が十分に確保されていないこと、その背景には、失語症の病態が複雑であり、一律の対応が困難であること、看護師と言語聴覚士間のコミュニケーション不足、患者と看護師間における信頼関係構築の不十分さがあることが明らかとなった。そこで、看護師と言語聴覚士が失語症患者をどのように理解し、各々がどのような関わり方をしているのか、その違いや共通点を明らかにし、両職種専門性や特質を相互補完できる、より実効性が高い、多職種協働モデルの構築に資する知見を得ることを目的とした研究を計画した。

高齢化社会が進む本邦において、近年、がん患者の生存率は治療の進歩により大きく向上している。一方、動脈硬化性疾患、特に心筋梗塞や脳卒中などの急性心血管イベントも、急性期血栓溶解治療や機械的血栓捕捉療法の発展、ならびに、二次予防薬(抗血小板薬、脂質低下薬、降圧剤、糖尿病治療薬など)の普及や進展により、死亡率が有意に低下している。しかしながら、がんおよび動脈硬化性疾患(特に心疾患および脳卒中)の所謂「サバイバー」が増加する一方で、これらの疾患に罹患する患者も増加してきた結果、がんと動脈硬化性疾患を個別に対応するだけではなく、併存する疾患群として捉えた医療戦略を立ち上げることが必要であると考えられる。しかしながら、がんと動脈硬化性疾患が併存した場合、安全かつ効果的な治療を施すためには、治療方針は患者ごとに異なり、複雑化されるにもかかわらず、現在の医療体制では両疾患を専門分化して個別に管理・治療する傾向が強い。そこで、がんと動脈硬化性疾患(特に心疾患および脳卒中)の併存に焦点を当て、疫学、病態、治療の現状をレビューし、今後の超高齢化社会に対応した統合的視点による管理戦略を構築することの必要性を明らかにすることを目的とした研究を計画した。

氏名： 村上 好恵	職位：教授	分野： 急性期看護学
2024 年度の研究活動の概要 1. 遺伝看護専門看護師の専門性に関する研究を開始し、データ収集を行っている。 2. 科学研究費（基盤研究 B、2020-2024）「がんゲノム医療に対応するがん看護専門看護師育成のための介入研究」のデータの論文執筆中。 3. 新たな科学研究費獲得に向けて申請を行った。		
キーワード がん看護、遺伝看護、サイコオンコロジー		
研究業績・活動 総説 村上好恵：がん看護実践の基本概念と方法「意思決定」、がん看護、29(3):293-296、2024 村上好恵：がん看護における看護師の役割と専門分野 実践力を高め続けるエキスパートへの期待、YORi-SOU がんナーシング、14(6):682-684、2024 講演 村上好恵：「腫瘍循環器領域における看護師の役割開発の展望」第 7 回日本腫瘍循環器学会学術集会、シンポジウム I、2024 年 8 月 3 日（姫路） 村上好恵：「遺伝性腫瘍の患者やご家族への看護を通して学んだこと」第 22 回日本乳癌学会北海道地方会、特別講演 I、2024 年 10 月 5 日（札幌） 社会活動 日本がん看護学会 理事 日本遺伝看護学会 理事 日本サイコオンコロジー学会 理事、看護師対象研修コース Step3 ファシリテーター 日本遺伝性腫瘍学会 評議員 日本看護研究学会 50 周年記念誌作成担当		

氏名： 矢ヶ崎 香	職位：教授	分野：慢性期・終末期看護学
2024 年度の研究活動の概要 1. 高齢がん患者の食生活と身体活動に着眼したがん・心血管セルフケアプログラムの有効性 2. 進行消化器がん患者の食欲とコーピングストラテジー、QOL に関する縦断研究 3. 抗凝固療法に関する効果的な意思決定支援方法の探索：Tool 開発と評価（Mixed Methods）		
キーワード がん看護、高齢者がん患者、がん薬物療法、腫瘍循環器		
研究業績・活動 【学術論文】 1. Manabe T, Oguma Y, Tabira K, Sugimoto M, Negishi K, Yagasaki K. Association between near functional visual acuity and physical function in community-dwelling older adults: a cross-sectional study: Keio university global research Institute baseline survey. BMC Geriatr. 2025.25(1):405. doi:10.1186/s12877-025-06074-6. 2. Sugimoto M, Yagasaki K, Matsuki E, Shimizu T, Sakurai M, Kataoka K, Doorenbos AZ. Unmet Needs and Health-Related Quality of Life Among Patients with Relapsed/Refractory Indolent Non-Hodgkin Lymphoma: A Mixed-Methods Study. Psychooncology. 2025. 34(2):e70103. doi: 10.1002/pon.70103. 3. Matsumoto K, Ryushima Y, Sato J, Aizawa Y, Aoyama T, Akaishi Y, Okamoto R, Sato Y, Sugano K, Tazumi K, Tsuji M, Fujikawa N, Bun S, Yagasaki K. Extravasation associated with cancer drug therapy: multidisciplinary guideline of the Japanese Society of Cancer Nursing, Japanese Society of Medical Oncology, and Japanese Society of Pharmaceutical Oncology. ESMO Open. 2024. 9(10):103932. doi: 10.1016/j.esmoop.2024.103932. 4. 後藤 芽里, 矢ヶ崎 香, 伊藤 早紀, 末崎 翠, 佐藤 麗奈, 細井 恵子. 中等症以上の天疱瘡・類天疱瘡患者の治療と生活における認識:質的研究 日本看護科学会誌. 2024. 44. 961-969.		
【主な研究活動】 1. 腫瘍内科医と腫瘍循環器医師らとの共同研究：「高齢がん患者の食生活と身体活動に着眼したがん・心血管セルフケアプログラムの有効性」キックオフ、第1ステップの研究プロジェクト開始 2. 循環器内科医師らとの抗凝固療法に関する効果的な意思決定支援方法の探索：Tool 開発と評価（Mixed Methods）に関する共同研究の推進 3. 血管外漏出に関する合同ガイドラインの論文化（採択）		

4. 進行消化器がん患者の食欲とコーピングストラテジー、QOL に関する縦断研究
(査読中)

【競争資金：基盤研究 B（研究代表者）採択】

高齢がん患者の食生活と身体活動に着眼したがん・心血管セルフケアプログラムの有効性 2024 年 04 月-2028 年 03 月

【シンポジウム】

日本癌治療学会学術集会「症状マネジメントの key となる患者のもつ力に着目した支援とは がん薬物療法を受ける患者の服薬アドヒアランスの支援」日本癌治療学会学術集会抄録集 62 回,CCPD7-2(2024.10)

以上

看護医療学部 研究年報 2024

発行年月 2025 年 10 月 10 日 第 1 版

作 成 者 慶應義塾大学看護医療学部 研究推進委員会
小池智子 田村紀子 深堀浩樹(委員長)
細坂泰子(副委員長) 矢ヶ崎香 山本なつ紀